
マスク

阿武都龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスク

【Nコード】

N0767F

【作者名】

阿武都龍一

【あらすじ】

冬。喉風邪をこじらした高校二年生の長谷川信吾は、咳がひつきりなしに出るような半病人の状態で学校に登校した。口元に、彼が嫌悪するマスクを付けた彼は苛立ちを感じながら授業を受けるのだが……。『抑圧された少年の抑圧と開放』をテーマに書いた中編小説。

電車が線路の上を滑る振動を感じながら、僕は一人本を読んでいた。座席の脚部から出ているあぶるような暖房の熱風が、ジリジリと僕から活字を追う集中力を削ぐ。全身が不自然な温まり方をして、いるのを感じた。

僕は暖房が嫌いだ。暖房の効いた室内にいと、いつも集中力が削がれ、意味のない苛立ちを覚える。こうなると、些細なこと例えば、マスクの中で泳ぐ吐息の匂いと温度も、吐息が鼻骨の辺りから逃げることで生じる瞬時のグラスの曇りも、苛立ちを増長させる要素になるのだ。ゴホゴホとこぼれる強い咳が僕の喉を苦しめて、それもやはり苛立ちを募らせるファクターとなった。

車内に、「まもなく」と、電車のアナウンス独特のだみ声が響いた。いかにも業務連絡といった感じの言い方で、次の停車駅を繰り返して伝える。そこは、僕の通う高校の最寄駅。すなわち、僕が降りる駅だ。

読みかけの本をしまいながら僕は立ち上がり、扉の前に向かう。

扉の前にはすでに二人の男子が立っていた。ポピュラーな黒の詰襟学生服。僕の高校の制服だ。に身を包み、それぞれ違うメーカーのショルダーバックを背負っていた。二人は、微笑み程度の笑顔と、気のない笑い声をお互いにあげあっている。今日は数学の小テストがあるらしいとか、ロクに勉強していないので合格するのは絶望的だとか、当たり障りのない雑談にふけっているようだった。

電車がゆっくりとしたペースで停車を始める。数秒前には一定の速さだった景色の流れが、ブレーキがかかるにつれてゆっくりになっていく。やがてプラットフォームに入ると、景色の中に防音壁が割り込み、車窓からの眺めを妨げた。

ほどなくして、ガクっという慣性の揺れと共に電車が止まった。振動でぶれた体の軸が戻ると同時に、蒸気が抜けるような音を響か

せながら扉が開いた。僕は前にいる二人に続く形で、電車を降りた。プラットフォームに両足を着けた途端、辺りに少し冷たい風が吹き抜けた。三月の頭ともなると寒さも和らいでは来る。しかし、だからいつて冬の面影が完全になくなる訳ではない。スクールコートをすり抜けた冷気が僕の身体に障り、再び数回咳をした。

僕は非常にゆったりとした足取りで階段を下りる。風邪気味とはいっても、特にダルさを感じている訳ではない。これが駅構内における、僕にとつてのいつも通りの足取りなのだ。執拗に咳が出てくること以外は、体調は至って平気だった。

この駅の通路は、まるでシャッター街のように閑散としている。欠伸交じりにトボトボ歩く数人の高校生の以外に、利用者はほとんど見られない。僕は彼らの後ろにつくように歩き、改札口を潜って駅を東口に出た。僕はその場で一度大きく伸びをしながら立ち止まり、さりげなく駅周辺の風景を見渡した。

一言で言ってしまうと、この辺りは殺風景な場所だ。民家はほとんど見られず、荒地や畑ばかりが広がっている。人の少ないのんびりとした土地……などと呼ばばまだ聞こえが良いのかも知れない。しかし、僕から言わせてもらえれば、赤茶色の土ばかりが無駄に広がる、不毛も不毛な場所だ。要するに、田舎と呼ぶのものはばかれるような未開発地域なのである。僕がこちら側の風景を好きでないことは、言うまでもないだろう。

しかし、最近は少しばかり事情が変わって来ている。

この辺り、近々ニュータウンができるとうことで、開拓を行っている最中なのだ。しかも、市が特に力を入れているだけあって、県内有数の規模になるそうだ。実際の話、駅を西口に出てすぐの所では、完成後には日本有数の規模になる予定のショッピングモールを建設中であり、いくつかの高級そうなマンションも完成している。駅周辺の道路も、現在の利用率に反比例した立派な物が作られている。もうしばらくすれば、『反』という言葉が外れることになるだろう。いわばこの駅は、今回のニュータウン計画における起点と言

えるものだった。

先ほど、駅の利用者がわずかだと言ったが、それはあくまで現時点での話だ。商業施設がオープンする今年の秋ごろには、もっと利用者数が増え、（あくまでニュータウン計画がうまく軌道に乗ればの話だが）ホームは通勤や通学をする人たちでごった返すことになるだろう。作る側としてはそうあって欲しいのだろうが、僕に取ってはあまり気分の良い未来予想図ではなかった。僕は人ごみがとても嫌いなのだ。

一、二度首をゴリゴリと回してから、僕はのんびりと歩き出した。この辺りの風景は嫌いなだけでも、舗装された道の道路の上を歩くと言うことはそんなに気分の悪いことではなかった。コツコツと、確かな手ごたえ（足ごたえ？）を踵から感じられるのは、何となく小気味がよかった。

五十メートル程歩いたところだった。突然、僕の喉から咳が一つこぼれた。

やばいと思う間もなかった。一回の咳を皮切りに、次から次へと大きな咳が出てくる。僕は思わずその場で立ち止まり、海老のように丸まって屈み込んだ。僕の意思を無視してあふれ出てくる咳の連発が、かき回すようにして喉を痛めつけた。

通りがかりの生徒たちが、こちらをチラチラと眺めてきているのを捉える。よつぼど重そうに見えたのだろう。訝しそうな視線の中に、若干の驚きの感情も感じられた。

やつと、と言ったところで咳が治まる。喉がヒリヒリと痛み、目尻には涙が溜まった。そして、荒い息を一つするたびに曇る眼鏡。マスクのせいで曇る、眼鏡の鼻骨付近のグラス。吐息はしばらくマスクの中でこもり、生々しい匂いやぬくさで僕の神経を逆撫でした後、鼻骨の辺りから逃げていく。それによって生じたり消えたりする曇りが、苛立ちを増幅させていった。

これだから、マスクは嫌いだ。

風邪気味でさえなければ、こんな拘束具など、頼まれたってつけ

たくなかった。しかし、先日まで僕は熱にうなされていたのだ。そして今でも砲撃のような咳は止まない。そんな残念な体調なのであった。

いまだにヒリヒリする喉に尾を引かれながら、僕は再び歩き出した。眼鏡は相変わらず、グラスの微妙な範囲内で、曇りが生じたり消えたりしていた。

僕が風邪をこじらせたのは、今から四日前のことだ。土曜日、朝の十時くらいに起きてすぐ、喉の奥に対して違和感を感じたのだ。最初、寝起きだからかと思った僕は、ン、ンンと二三度咳払いをしてみた。しかし、全くもって意味がないようだった。不審に思った僕は、しばらく眉根を寄せながら、状況を把握しようとした。そしてやがて、根本的に喉の調子がおかしくなっていることに気がついた。まるで、埃を思いっきり吸い込んだ時のようなザラザラ、チリチリとしたむず痒い痛みが、ずっと喉に張り付いているようだった。

気持ち悪いな……。

しかし、そうは思っても、この時はまだ偏頭痛と同じ認識であった。どうせ時間が経てばすぐに治るだろうと、軽い気持ちだった。ここ数年、偏頭痛くらいでしか体調を崩した覚えがなかった僕だった。なので、自分が風邪を引いたという発想は全然出てこなかったのだ。

しかし程なくして、朝食をともに食べられない程に酷い頭痛が生じ、芯から凍えているような寒気を感じだした。まさかと思って熱を計ったら、まさかの八度オーバーだった。僕にとって、小学校二年生の時にインフルエンザにかかって以来の大記録だ。この時になって初めて、風邪という言葉が頭によぎるに至ったのであった。結局、朝食をほとんど食べられないまま、母に車で連れられて（自転車を漕ぐことさえまならなかった）診療所に向かった。「風邪ですね」と、至極ありきたりな診断を、中年の油っぽい顔をした

医者から受けた。どうやらのだ仏が真つ赤に腫れ上がっているらしく、風邪もそこから来ているらしかった。結局は「結構酷いですがまあ、薬を飲んで数日ほど寝れば治るでしょう」と、ごく平凡な結論に至り、近場の薬局からいくつか薬を処方して貰い、帰宅した。

それから土日、さらには月と一日中ベッドの上で寝たきり状態だった。酷い頭痛と咳のせいで、それ以外に出来ることなんてありはしなかった。例えばインターネット。頭痛のせいで眼精疲労が著しく、ブラウザが歪んで見えるなんてレベルじゃなかった。眼精疲労くらい何度も経験している僕でさえ、文字がバラバラと踊り出して見えるなどという感覚は初めてだった。それに寒気が加わっていると来れば、もはやブラウザの向こう側はファンタジーやメルヘンの世界となった。しばらくすると吐き気まで覚えてきて、そもそもこうして呼吸をしていられることにすら感謝しなくてはならないのだと悟らざるをえない始末だった。

また、それ以上に咳が酷かった。最初は鬱陶しいだけの代物だと思っていたのだが、甘かった。何度も何度も咳を出しているうちに喉を痛めたのだ。まるで擦過傷に触れた時のような、瞬間的に芯へと迫る激しい痛みが、咳をするたびにするたびに襲った。僕は生まれて初めて、咳という行為に恐怖心を覚えたのだった。終いにはコンコン程度の咳にさえ、心の底から死んだような気分に限るほどになるのであった。

しかし、流石に薬を飲み続けて、ずっと寝てもいれば、風邪くらいは平気で治るものである。治まったりぶり返したりを繰り返しながら、頭痛や悪寒が少しずつ弱くなっていき、三日後、つまり月曜日には大方落ち着いた。体調自体もほぼ良くなっており、学校に登校するのにも差し支えないほどになった。火曜日に学校に行かなかったのは、「めんどくさいから、もう一日くらい休もう」という軽い気持ちによるものだった。

しかし、咳だけはとうとう快方には至らなかった。頭痛や悪寒が引いていく中、咳だけは変わらず活発に発せられて、ひたすらに喉

を痛めつけた。喉の調子も、変わらずおかしいままであった。

信吾、咳が止まらないようだったら、マスクをつけたらどう？
そんな時 火曜日の夕食の席の時に、母親がそう勧めてきたという訳であった。ちなみにこの日、父親は仕事の都合で家にいなかった。

その時、咳で飛んだ飯粒を拾っていた僕は、チラッと母の顔を見た。少しばかりの無言の間。バラエティー番組の司会者の声だけが食卓に響く。無意識ではあったが、僕は母の言葉に眉をしかめていた。一瞬だけ、マスクをつけている自分を想像したのだ。そしてその一瞬だけで、僕は不快な気分になった。僕は静かなため息をつく。予想通り、マスクをつけている自分の姿を想像するのは、自身の生理的嫌悪感を刺激する。

僕は、マスクが嫌いだ。大嫌いだ。暴走族の三下のように見える目、マスクの中でこもる息、執拗に曇る眼鏡。例え風邪をこじらせている短期間でのことであっても、そんなものをつけて過ごさなければならぬというのは、ただそれだけで眩暈ものであった。

飯粒を拭ったティッシュを丸めて、テーブルの端に置く。食事のテーブルの上に放置する物としては印象が悪いが、ゴミ箱が近くにないので仕方がない。

「いいよ別に。大丈夫だよ」

母の顔を見ずに、僕はそう言い捨てた。心配そうに「本当？」と問いかける母を無視して、大皿からほうれん草のバター炒めを摘んだ。それをご飯と一緒に口中に放り込んだ途端、再び咳が出た。今度が出る瞬間に、予感のようなものを感じた。不意打ちだった先ほどとは違い、右手で口元を押さえたために飯粒は飛ばなかった。その代わり手のひらには、唾液まみれになった多数の飯粒が、グシヨグシヨになって付着した。

「ほら、やっぱり駄目じゃない」

呆れたようにそう言う母。大失敗を犯したマジシャンを見るよう

な彼女の瞳が、「もう決まりね」と雄弁に語っていた。

めんどくさい。

こういう時 取り分け、誰かに何かを言いくるめられそうになった時、いつも不愉快な感情に襲われるのだ。ゲル状の生命体に、全身をがんじがらめにされたような気分だ。

が、この時はすぐに、いけないと自身を戒めた。反抗期の中学生じゃないんだ。こんなことでイラっとくるようでは、高校生などとは恥ずかしくて名乗れやしない。

しかし、一度ゲルに全身を絡められた時、それをすぐに拭いきることは難しい。そのゲルには強力な粘着性があるのだ。中途半端に溶けた飴のように、強力な粘着質を持つベタベタのようなそれである。

僕は一つ、ため息を吐いた。僕は箱から新しいティッシュを一枚とりだし、それで手のひらの飯粒と唾液をふき取った。一枚ではふき取りきれず、粘液つきの飯粒が中途半端に残る。もう一枚を取り出し、それで完璧に飯粒を拭いきった。

「だから良いよ、めんどくさいし」

肩をすくめる母。「何を言ってるんだか」と言わんばかりに。イラッと来る。

「めんどくさいはないでしょう？ 自分の体のことなんだから」

「マスクなんて、あってもなくても変わらないよ」

「何言ってるのよ。マスクって言うのは、他の人に対する配慮でもあるんだから」

「だから良いって。めんどくさいよ」

「何がめんどくさいって言うのよ？」

「何でもいいだろ？ めんどくさいものはめんどくさい」

と、言いかけの時に、再び咳の発作がでた。ゴフッゴフッと、大砲のような咳が数回続く。いい加減、喉が痛くなり始めていた。

ちくしょう、よりによって、今出なくてもいいじゃないか。

気持ち、体が変に火照り、だるさを感じ始めていた。食欲もなく

なり始めている。所詮は治りかけの半病体。いくら全快したと思っ
ていても、実際はいつぶり返し初めてもおかしくない身なのだ。

僕にとって都合の悪い方向に、話が進んでいる。決定的な状況の
悪化によって、加速度をつけて。

「……まったく」

母はため息を吐くと立ち上がり、テレビの下の救急箱からマスク
を取り出した。パスツという乾いた音を立てて、それがテーブルの
上に置かれる。包装紙に包まれたマスク。僕は何となくでそれを手
に取った。何度か裏表に返した際、やはり一度か二度程咳が出た。

パッケージには、マスクをつけた四十台の女性の写真が載せられ
ている。これといった特徴は感じられない、普遍的なサージカルマ
スク。しかし、パッケージに書かれたキャッチコピーや説明つきの
矢印などが、健気な商品アピールを行っていた。だが、新構造がど
うのこうのと主張されても、こちらとしてはまいち、既存商品と
の類似性を破ることが出来ているようには思えない。

パッケージを見ているうちに、僕は嫌な気分になってきた。キャ
ッチコピーに対してではない。問題は、パッケージの女性に対して
だ。

当然のことだが、パッケージの女性の鼻から口は、マスクによっ
てしっかりと覆われていた。それはまるでプレパレートにおける、
スライドガラスに張り付くカバーガラスのようで。そして、その病
的なほどの密着感、間違いなく僕の呼吸器官を苦しめるだろう。

勘弁してくれよ……。

僕は心の中で首を振った。どうせ、こんなことになるだろうとは思
っていた。しかし、悪い予想がそのまま当たるだなんて、喜ばし
いことなはずがない。

「ほら、これでめんどくさいも何もないでしょ？ ご飯食べて風呂
に入ったら、つけなさい」

母の顔を見る。彼女は自分の行いに対して、まるで何の疑問も抱
いていないようだった。

止めを刺された。

そう僕は思った。全身に絡んでいたゲルの粘性が強まり　フツフツと熱を帯び始めるのを感じた。全身を、暖房の熱風のようなやり方で熱し始め、やがてその熱は頭にも　理性にも届こうとしていた。

「って言うか信吾、無理なようだったらご飯もそれまでにそれまでにしておいたら？」

両手をテーブルに打ち付けながら立ち上がった。椅子が乱暴な音を立て、テーブルとその上の食器が激しく揺れた。母の表情がピクツと強ばったのを、視界の端で捉える。

「ああ、分かった。この辺にしくよ。風呂入ってさっさと寝る」

ご飯の残った皿を、早足にカウンターの上に片づける。母の顔は見ない。絶対に見ない。今、母の顔を見たら、どんな感情に襲われるか分からないから。そうして発現された感情は、決して物事をいい方向には導かない。

「何よ、怒ってるの？」

案の定、背後から険を含む声が聞こえる。

「怒ってない」

母の顔を見ずに、僕は答えた。こういう時、いつも僕は相手を無視することが出来ない。そうすることは、僕の心をますます痛めつけることになるのだから。こういう時、いつだって僕は悪者なのだ。僕は僕がそうであることが分からないほどに馬鹿な人間でもなければ、そうであることを開き直れるほどに愚鈍な人間でもなかった。

「怒ってるんでしょ？」

「怒ってない」

「何で怒るのよ？」

「別にどうだっていいだろ？」

「何？　私がマスクを出したから怒ってるの？」

僕はカウンターの前で足を止めた。持っていた大皿をカウンターの上に置く。今置いた皿が最後一枚だ。僕はこの時点で風呂場

向かって良いはずだった。しかし、止まった足は微動だにしない。

「ねえ、何でそんなことで怒るのよ？」

全くだ、と冷静な僕だったら思うのだろう。いや、底の部分では実際にそう思っているのだろう。しかし、今の僕は全然冷静ではない。冷静だったら、それこそ僕は母とこんな喧嘩などしていないのだ。

僕が義憤以外で起こす怒りというのは、くだらないことに対しての理由のない苛立ちによる『かんしゃく』なのだ。まるで老いばれじいさんの起こすような、それである。

「うるさいな。何だつていいだろ？」

「よくないわよ！」

叫ぶ母。無駄に甲高い、典型的なおばさんの声色。ああ、それすらムカつく。僕も、母も、ただただヒステリック。

「お母さんはあんたのためにマスクを用意してあげたんだからね！」僕は振り返り、母の顔を見た。いや、もはや睨みつけていた。母も、眉を吊り上げてこちらを睨んでいる。僕の瞳もそれに負けず苛烈だ。母にとって、今噴出している怒りは義憤として認識しているのだろうと思った。意味不明な理由で親に怒りをぶつける、不当な息子を叱りつけているつもりなのだろう。

母は根本的に間違っている。それは、確信して言える。

母が本当に僕のための行動をしていると自負したかったら、最初からマスクなど用意するべきではなかったのだ。ましてや用意しておいて、我善行を行われたし、と言わんばかりの態度を取るなど、問題外だ。僕から言わせてもらえれば、今の母は殺されても文句は言えなかった。最近『キレル』若者が多いと、何かにつけてニュースのコメンテーターが発言し、母もそれを諳んじているのだ。そして彼女がそれを諳んじる時、いつも僕の目を見るのだ。

その『キレル』若者。僕もその一群に含まれるであろうその若者達が、刃物を片手に『斬れる』若者に脱皮してしまうことが少ないこともまた、マスメディアが口を酸っぱくして叫んでいるこ

とではないか。なので僕が、その『斬れる』若者になったところで、それは全くおかしいことではないのだ。『キレル若者』が『斬れる若者』へと変貌を遂げるボーダーラインは非常に曖昧で、だからこそ非常に近い地点にある可能性がある。ある若者にとっては駆け足をしなければ越えられる地点にあり、ある若者にとっては たった一歩踏み出した先にそれがある。

しかし僕は、僕の怒りがその程度の品格であることをよく分かっている。こんなことで露骨な怒りをあらわにするなんて、無様であるだけでなく愚昧だ。

どうしてマスクをつけるのが嫌だって分かってくれないんだよ！

そんなことを叫んだところで、あるいはその思いを胸にくすぶらせたところで、一体何になるというのだろうか？ 母から言わせてもらえれば、『どうしてたかがマスクをつけることでそんなに怒るのだ？』ということだろう。母にとって、咳をする息子に対してマスクを手渡す行為は揺るがしのない善行であり、一般的にもその通りであるのだ。

結局、人の考えること全てを理解することは有りえない。だからこそ、『僕の気持ちも知らないくせに！』という手合いの言葉が鼻で笑われるのである。

そのことを理解していながらも、感情的になってそのことで無駄な怒りを感じて、不毛なかんしゃくを起こしている。それが、今の僕なのである。

ああそうだ、僕が悪い。そんなのは、当たり前のことじゃないか。悪くて、馬鹿で、幼稚で、愚昧で、愚劣で……

「……悪かったよ。ああ、僕が悪かったよ」

そっぽを向きながら言った。これ以上母の顔は見たくない。いや、とても、直視出来たものじゃない。

「嘘をつくな！」

と、母は叫ぶ。僕は彼女が言わんとすることが予想できた。

「ちつとも悪いと思つてないくせにそんなこと言つな！ 大体あんたはいつもいつも……！」

僕は早足に風呂場に向かい、脱衣場に入ると扉を閉めた。バタンという馬鹿でかい閉戸音と共に、母の声が途絶える。戸の隙間から彼女の声もれているような気がしたが、それは聞かないことにした。

改めて言おう。僕が悪いということは分かっている。たかがマスクをつけるつけないで苛立ち、怒りをぶつけるような僕が正しいはずがない。

それでも、処理の仕様がでない怒りが、全身から発熱するようにこみ上げてくる。マスクをつけなくてはいけない自分、マスクをつけるように強要してくる母、そしてその通りになつてしまった今の状況……自身の無能。

ム力つく！ ム力つく！ ム力つく！

僕は脱いだ上着を洗濯カゴに思いつき叩き入れた。その時の「うっつ！」という唸り声が、まるで醜悪な獣のようだった。幼い自分をますます嫌に感じるには、十分に醜悪な声。

いくら通学時には何となくとも、所詮僕は治りかけの半病人で、しかもマスクを着用している身である。そんな僕が授業を受けたところで、それを愉快なものに感じるはずがないことは自明だった。

相変わらず、強い咳が何度も喉から出てくる。ゴホッと一つ出るたび、鋭い痛覚が執拗に襲った。また、一時間目の授業に入った途端、風邪が再び振り返し始めた。身体が火照り、頭がちゃんと回らなくなり、先生の授業内容が全く理解出来なくなった。どういう訳だか、先生の言うことを考えようとすればするだけ、意識が遠のいていくようだった。

そして、マスクの着用。一呼吸をする度に、眼鏡は曇り、息はこもる。これだけでも授業に集中できなくなるというのに、中で漂う息の臭いが僕にとどめをさした。まるで果物の缶詰の汁が腐ったよ

うな、気が滅入る臭いだった。

時折、我慢ならなくなった僕はマスクを外した。マスクのガーゼが口元から離れた瞬間に感じる、窓を開け放ったような開放感。しかし、それも長い時間は持たない。しばらくすると、例の咳が先ほどと変わらずに出てくる。しかも、ガフンっ！ ガフンっ！ と、気持ち悪化したような感じさえするのだ。こんな状態の僕に対して、周囲のクラスメイト達は当然良い顔をするはずがない。だから再び、マスクを着ける。が、またマスクに堪えかねて再び取り外す。この着けたり外したりを、何回も何回も繰り返したのだ。

刻々と、体調の崩れ具合が深刻になっていった。体の火照りは重い寒気へと性質を変え、額を拭えば大量の脂汗が手のひらに付着した。ふと耳を澄ました時、荒く不規則になっている自身の息遣いを自覚せずにはいられなかった。そしていつしか、机の上に体をつ伏しながら意識を保っているのが精一杯という状態にまで追い込まれていた。

「おいおい、大丈夫かよ信吾ちゃん？」

三時間目の数学の時、そんな僕に先生が声をかけてきた。信吾ちゃん……『ちゃん』。甲高く軟派で、まるで馬鹿な高校生のような声。自分の職業を、場末の学習塾の講師と勘違いしているような教師だった。

顔を上げると、そこには僕の机の横で物珍しそうにこちらを見下ろす先生の姿があった。クラスの視線も、何となくこちらに集まっているのを感じる。

この時、喉元に大量の剣を突きつけられたような錯覚を覚えた。僕は一言、「大丈夫です」とだけ答えた。これだけで済んだら、良かったのに。

「本当かよ信吾ちゃん？」

数学教師・浜田亮（23）。通称・ハマリョーの得意技、『余計な一言』の発動である。

「何か信吾ちゃん、しおつしおに枯れたキュウリ見たいな顔してんぜ？」

ドカドカドカ！

満場一致、クラスのあちらこちらから壮大な笑いの渦が巻き起こった。決して心地の良いそれではなく、聞けば聞くほどに心を削り取られるような心地になる笑い声。突きつけられていた剣先が、薄皮一枚分だけ刺さる。

悪寒と身震いが強くなった。自分がこの場にいることが、とても恐ろしかった。まるで、言葉の通じない民族の、何か残虐な行為を行う祭りに無理やり参加させられたような気分だった。

混乱。いや、恐慌。僕は瞬間にそんな状態になった。

この状況は、嫌だ。どうにかしなくては。早く、どうにかしなくては。

焦りの感情は、盲目的に状況の打破を考えた。盲目的な方法による状況の打破しか、考えられなかった。

「本当です、僕は大丈夫です。風邪気味だけです。僕のことはほっとおつてえくださいよ」

噛んだ！

そう思った時には遅かった。

ドカドカドカ！

クラスが一丸となった笑いの大洪水。一瞬、何がこのクラスに起こったのかを、脳みそが受け付けなかった。しかしすぐに、その現実を受け入れることになる。

僕の頬が、体の火照りとは別に赤くなる。激しい羞恥とそれによって起こされる後悔が、僕の心臓をグルグルと駆け巡った。

よりにもよって、ほっとおつてえくさいと来たものだ。我ながらこんなのはありえない。ちよつかいを加える側にとって、これほど食指のそそられる餌はないではないか！

長谷川信吾（１８）。『余計な一言』を得意技にしているのは、何もハマリョーだけではなかったのだ。

死にたい。

まさにその言葉は、今の僕が反芻^{はんすう}するためにある言葉だった。

「……ほつといてくださいっていうかさあ。真面目な話、普通に見るに耐えかねる感じなのよ、信吾ちゃんさ」

そんな僕の心境と周囲の空気とは裏腹に、ハマリヨーの返答はいたって普通のものだった。お前の抱く葛藤なんてどうでも良いという感じが伝わってくる。僕も自分の抱く悩みの矮小さと、そんな悩みを抱いてしまう自分のさらなる矮小さを自覚する。ますますもって、死にたい。

「うつわー！ ハマリヨーまじ優しいわあ。俺にももつと優しくしろよー！」

クラスの男子 奥田恭介。クラスの中でも特に幅を効かせている不良系の男子 が、ふざけたきんきん声でふざけたことを言った。僕の目の前の席。こいつとは去年も同じクラスだった。何かにつけて僕にちよっかいを出して、僕を苛立たせてきた人間だ。ああもう、色んなふざけた方向性で色んなふざけたことが、火の粉のように僕の身へと降りかかる。僕は出来るだけそれがかからないように体を小さくして縮こまっているしかない。

「うつせえ、だったらもつとちゃんと勉強しろってんだよ。いつつも宿題ださねえで、このこのー！」

先生は「この、このー！」と声を出しながら、丸めた教科書で奥田をつつく。奥田が「ちょやめ、うざ、うざいってハマリヨー！」と、教科書攻撃を避けたながら面白半分な叫声を上げる。再びクラス中で笑いが起こった。僕は目を見開いて奥田と先生のことを見つめる。僕はふと恐ろしくなって、周囲の生徒達を見渡した。僕が見た限りでは、ニヤリとも笑っていない生徒は一人もいないようだった。僕はその事実に愕然とした。

何なんだよ、これは一体？

いつものクラスの授業風景のはずだった。しかし、とてもそうは思えなかった。

彼らは一体、何がおかしいというのだろうか？ 何がおかしくて笑いを共有しあっているというのだろうか？ 人の感性というものは原則として自由のはずだ。普段もそう思っているし、今でもそう思っている。なのに、何で僕はこんなにも、笑いどころを見つけれないことに対して恐怖を抱いているのだろうか？

分らない、分らない、分らない……。

ビイ、ビイ…… 咳が出る。喉が痛い。体が震えてくる。

薄ら寒い。

「で、ハマリヨーさあ、信吾ちゃんのこと忘れてね？」

奥田の一声。一斉にこちらに向かれるクラス中の視線。より鋭く研ぎ澄まされた刃先を、一斉にこちらに向かつて突きつけられた。

「忘れてねえよ。で、信吾ちゃん大丈夫か？」

ハマリヨーが僕に声をかける。真剣な声色。真剣な問いかけ

無粋は許されない、真剣の突きつけ。

「確か昨日と一昨日休んだんだよな？ 今すぐ保健室行ってくるか？」

「？」

「……………」

「っていつか行った方が良さそうだな。何かマジでやばそうな顔してるし」

本当だったら、僕はすぐに「行きます」と言いたかった。そう言わない理由がなかった。何故なら、保健室とはきつとここよりは良い場所だろうと思われたからだ。そこにいる保健室の先生は、少なくとも彼らのように、意味不明な笑い声を上げたりはしないだろう。しかし、自分に刃が突きつけられていることを思い出すと、たった四文字を紡ぐための唇はワナワナとしか動かなかった。

喋ること、いや、もはや声を出すことですら恐ろしい。もし僕が、彼らの意にそぐわぬことを言ってしまったら、一体僕はどうなってしまうというのだろうか？ 底のない穴の目の前に立つような気分だった。

「……………おい、信吾ちゃん？ どうしたーのー？」

ハッとして、僕はハマリョーの顔を見る。先生は笑顔の裏に、訝しげな感情がにじみ出ていた。何となくそれが「信吾は変な奴だなあ」と暗に主張しているような気がして、とても恐ろしかった。

変な奴　異端者。先ほど、唯一笑わなかった男。思考を、思想を違える　排斥の対象者。

ふと奥田の表情を見ると、ジイっとこちらを無表情で見つめていた。僕はそれにもまたゾツとした。先ほどハマリョーとじゃれあっている時とは、まるで百八十度違う白けた双ぼうと表情。それは、軽蔑している人間に向けられるそれと全く同等のように思えた。僕はさらに、周辺から同じような性質の視線を感じた。

何かの宗教的な儀式の際に、衆目の面前で神器を破壊してしまった時などに、きつとこのような目を八方から向けられるのだろう。

怖い、怖い、怖い……！

「おーい、し」

「ひっ！」

ガタッ！

「……あっ」

僕は立ち上がった。いや、立ち上がってしまった。

ポカンとした表情のハマリョー。変わらず無表情の奥田、クラスメイト達。

「な、なんだよもー。いきなり立つなよ信吾ちゃん。びっくりするじゃねえかよ」

ハマリョーの、裏返り気味の声。それが、いかに自身の行動が、周囲にとって突飛なものであったかを伝えた。

僕は、またしても軽率だった。恐怖に対して、堪え性がなさすぎた。周囲に脅え、しかし周囲に従属できない、精神的脆弱。その結果が、この気まずい状況。どうしようもなく、浮いた奇行。

こうして周囲から、ますます乖離していく。

もう……嫌だ。

「……保健室に、行ってきます」

それだけ言うと、僕は先生の横を駆け足に通り過ぎた。

「お、おい、ちょっと……！」

ハマリヨーの声を無視して、僕は教室を出て行った。僕が教室を出た瞬間、クスクスとした笑い声が僕の耳に届いたような気がした。いや、恐らく気のせいではなかった。その直後に、ハマリヨーの「ほーら、静かに！」という声のはつきりと聞こえたので。

半ば走るように廊下を、階段を通る。眼鏡は、相変わらず曇りがついたり消えたりしている。過剰な手足の振りによる激しい運動によつて、その周期が早くなっている。階段の二階を下ったところの踊り場で、僕は強い咳を漏らした。その場で立ち止まり、何度も何度も咳を吐き出す。

喉が痛くなり、寒気に震え……マスクの中にこもる息の残り香に、息苦しさを感じた。

息苦しさに囲われた、マスクの中。抑圧される、僕の呼吸器官。抑圧されているものが呼吸器官だけじゃないような気がするの、きつと気のせいではないはずだった。

四時間目はずっと、保健室のベッドで過ごしていた。

保健室につくなり、僕は保健室の先生に症状の説明をし、説明した通りの症状をアンケート式のカードに書いた。

それから、体温測定を行う。七度九分。先生にそう伝え、先生は少し眉を潜めた。先生は、いささか皺が目立ち始めている、ロングヘアーの三十台後半と思われる女性である。先生は渋い顔で、こちらの顔を覗いた。

「……酷いわね」

僕は苦笑いを浮かべながら、「ええ」と頷いた。自分でも、随分と酷いことになっているなと感じたのだ。

「どうする？ 今すぐ帰る？ それとも一時間くらい寝て、様子見る？」

真剣な声色で、先生が尋ねてきた。

「寝ます」

僕はすぐに答えた。個人的にはすぐに帰りたい気分だったが、この体調のままで帰るというのは、流石にきついと思ったのだ。

僕はその旨を先生に伝えて、上着と靴下を脱いでベッドに潜り込んだ。目をつむると、消毒液のような臭いが鼻腔に強く漂った。きいた。すぐに眠れるだろうと思っていたが、意識がまどろみかけるたびに咳が出て、それが阻害された。

チャイムの音で僕は目を覚ました。もともと、寝ている間も咳が酷くて、あまり良くは眠れなかったが。それでも、体調の方は少しばかりマシになっていた。少なくとも、酷かった悪寒は大分治まっている。これなら、酩酊したような意識で家路につくような事態は避けられそうだった。

白幕が開かれるスライド音と共に、僕は目を開ける。幕の間から先生が顔を出してこちらを覗いていた。

「どう？」

一言、先生は訊ねた。

「大分、楽になりました」

マスク越しのガラガラ声で、僕は答えた。

僕はベッドから抜け出して、再び熱を測った。七度四分。まだまだ安心は出来ないが、先ほどよりはマシになった。

「どうする？ 顔色良くなったみたいだけど、次の時間は授業に出る？」

「いえ、今日はお昼を食べたら帰ります」

今日はもう、教室で授業を受けたい気分ではなかった。今教室に戻っても、あの雰囲気には耐えられそうにはなかった。それだけで再び風邪を悪化させてしまいそうだった。

「そう……じゃあ、そのことを先生に報告してきなさい」

「はい。ありがとうございます」

それから、「それでは失礼します」と言って先生から背を向け、立ち去ろうとした。

「あ、そうだ」

と、その先生に呼び止められた。振り返る。先生の表情は、少し難しいそうに陰っていた。ふと、悪い予感に駆られた時に、自分もこんな感じの表情を浮かべるだろうと思った。

「さつき、カード書いてもらったでしょ？」

「はい。それがどうかしましたか？」

僕は首を傾げながら問うた。

「うん。そのことで、ちょっと気になることがあってね」

気になること……こちらとしても、全く心当たりがない訳ではなかった。

「ああ。アンケートのあれですか？ 『死にたいと思ったことがありませんか』って奴」

先生はうなずいた。僕は、やれやれと思いながら苦笑いを浮かべた。

それは、カードに書かれていた質問事項の一つ、『現在自身にあてはまるものにをつけなさい』にあった回答の一つだった。

よく夜更かしをするか、夜食をよく食べるか……そんな回答群の最後にあつた、この選択肢。それを見たとき、僕はそれを冗談を見るような思いで数秒間凝視した。しかし、僕はしばらくしてやれやれと思いながら をつけたのだ。

死にたいと思ったことがありますか

何を今更、と僕は思う。僕から言わせてもらえれば、僕のような人間が、死にたいと思わない訳がないのだ。

「学校や家で、何かあるのかな？」

「何か、ですか？」

僕は眼を右上にめぐらせて、心当たりを探った。しかしそれは、探すまでもないことであつた。心当たりは、探求の旅に足を向けるまでもなく、僕の目の前にたくさん落ちていたのだ。

「そうですねー……」

僕はそれを手に取り、先生に見せようとした。それはきつと、他

人の目に晒すに足るものにあつたに違いなかった。

しかし 僕はそれを手に取ることは出来なかった。

何でだろうか。僕はしばらく、焦りすら感じながらその理由を考えた。そして、それらしい理由を考えることが出来た。

それはいわば、無数にありすぎる傷跡であつたのだ。誰かの手で傷つけられたことは覚えていいる。しかし、一線を退いたヤクザのようにつつ自慢していくには、途方もないほどに多すぎるのだ。

それはただ、記号的な結果だつた。『傷つけられた』という事実だけがあいまいに、しかし、存在感を持つて残る、こびりついた影。……部活とかで、ちょこちょこ色々あつたりするんです」

だから僕は茶を濁した。確かにそれは僕の『死にたい』の要因ではあつたが、それをもつて全てを包括するにはあまりにも表面的すぎた。

「……部活の中でイジメを受けてるの？」

「まさか」

僕はハハッと軽く笑つた。

部活の友人とは、一応とても仲が良い……はずだ。

「そう……じゃあ例えば、どんなこと？」

「説明するのも恥ずかしいくらいに、下らないことですよ」

「どういうことかな？」

「例えば友人達にからかわれるたびに、そう思つたりするんです」

「……何か、酷いことを言われるの？」

「うーん……ええ、まあ」

「それはどんなこと？」

「……だから、先生が聞いたつて下らないだけのことですよ」

僕は、口元だけの苦笑いを浮かべた。

「でも、僕にとっては屈辱的だつたりするんです」

先生の眉が潜まり、表情が重たいものになる。僕の言葉に、特にありもしない裏でも感じたのだろうか？

「……ねえ。先生ね、隠してることがあるんだつたら正直に話して

欲しいな」

「は。ないですよ、隠してることなんて」

「本当に？」

「本当です」

先生はしばらく僕の目をじっと見つめた。別に必要でもない『行間読み』の必要性を感じてしまったのだろうか？ 別に先生から目を逸らす必要性も感じなければ、瞳を力ませる必要性も感じなかったので、僕は特に何かを意識させることもなく先生の目を見つめ返した。

やがて先生は溜息をつきながら、首を横に振った。大げさな動きだ。どうやらありもしない『行間』を感じ取ってしまったようだ。しかもそれだけには飽き足らず、そのありもしない『行間』を明々後日の方向に見いだしてしまったようだった。めんどくさいことになるのは必至だった。

「ねえ、お願いだから嘘はつかないで欲しいな。それで苦しむのは長谷川君なんだよ？」

「だから、嘘なんかついてませんって」

「じゃあせめて、長谷川君の言う『くだらないこと』を聞かせて？
どんなにくだらないことでもいいから、ね？」

今度は僕が溜息をつく番だった。全く、両親といい部活メンバーといい、何でもこう、一度懷疑心を抱くとしつこく食らいついて来るのだろうか？ 僕が何でもないと言ったら、それは本当に何でもないことだというのに。

「しつこいですね。だから僕は……」

その時、にわかにならうばさを感じた喉から、大きな咳が出てきた。三回、四回と、出てくる度に、僕の喉がかすれるように痛んだ。そんな僕の様子を見て先生は、

「ああ、ごめんね。分かった。今日はあまり聞かないことにするわね」

と、我に返ったように慌てた様子で言った。僕は「いえ、大丈夫

です」と、淡い笑みを浮かべながら返した。

「長谷川君、でもね……」

と、先生は言葉を付け加えた。何となく、ろくなことを言い出しそうな予感はしない。

上から目線で話される、何か僕には到底考えが及ばないであろう高尚なような言葉。

「長谷川君の場合、あまり難しく物事を考えちゃ駄目なような気がするのよね」

難しく物事を考えすぎる。それは両親にも指摘されたことだ。ただし両親に言われた時は、頭に『変な方向で』とついたのであるが、両親の説が正解だな、と僕は思う。

僕自身は、何も考えていないような青年であると自覚している。知識もなければ思考力もない。非常に無力で、つまらない人間。

ふと、何かを思案しようとする時、自分の中にはガラクタの価値観しかないことに気がつく。僕の考えることはみんな、当たり前のことであるか、何かの折に浅慮であったと思い知らされるものばかりだ。しかし、かといってそこから抜け出せるような努力をすることもない。

要するに僕は、同じところをグルグルと低回し続けている人間なのだ。

自分の狭大な視野の中でしか物事を考えられず、その中でグルグルと同じものしか見ることが出来ない人間。そして、ふと何か違う高尚な物事が見えた時、その眩しすぎる光に目がくらみ、尻尾を巻いて逃げ出す人間。それが、僕だった。

「……そうなのかも、知れませんがね」

僕は再び苦笑いを浮かべた。

僕は、実に素晴らしく、死ぬべき人間だった。死ぬべき人間社会的な意味で。恐らく社会では、こういう人間をもっとも必要としないのだから。

ネット何かで、「ニートは死ぬね！」なんて言葉を見かけたりする

と、それが実に良く分かる。恐らく僕のような人間が、ニート彼らの言う社会のクズに成り果てる。だから僕は、社会のために、と言う言葉が嫌いだ。彼らは往々にして、社会に対して異常な信仰心を持ち過ぎている。彼らにとつて社会という概念は絶対的なものであり、それに適合出来ない人間は死んで当たり前だと、少なくとも心の奥底では思っている。例えば、学校のイジメが時として必要悪になることから、それが良く分かることだろう。学校という名の社会、小社会に適合できない人間は、排斥されて然るべきなのだ、彼らは暴言を弄し、屈辱を与えてくる。

かつて、周囲の人間が僕に対してそうであったように。

「正直に言っちゃうと、長谷川君ってそういう顔してるもの」

顔ねえ。

「顔って何ですか、顔って？」

「真つ暗なところで一人、黙々と考え込み続けて、結局どうにもならないって感じの顔」

僕は苦笑した。なんじゃそりや。そう思った一方で……あながち間違いではないこともまた、笑えた。

咳が四度ほど出て来た。喉が痛い。

「……確か僕と先生って、こうして面と向かって話すの初めてですよね？」

「ええ、そうね」

「ですよ。それなのに、そんなことをはつきり言っちゃいますか？　普通？」

「あら、デリカシーがなかったかしら？　だったらごめんね」

「いや、別に良いですけど……」

「まあ、私は一応養護教諭だからね。担任の先生に負けなくらい、真剣に生徒の顔を見てるつもりよ」

「はあ、そうですか」

まあいつも百点満点って訳じゃなかったけど、と先生はカラカラと笑った。

先生の言葉は嘘ではないなと思った。先生の言う『顔』と同じように確証はなかったが、何となくそんな気がした。

「……でも、長谷川君みたいな子に、一つだけ言えることは」と、微笑みながら、しかし、瞳は何かを訴えかけるようにきらめかせながら続けた。

「自分だけが特別だ。自分だけが苦しんでる　そんな風に思ったら、絶対にいけないってこと」

「……………」

この一言で、

色んなことがぶっ壊れた。

「確かに、長谷川君もつらい思いをしてるかも知れない。私も、それを否定するつもりはないわ」

「……………」

ああ、それは、

「でもね、そんなのは誰だって同じことなのよ。それは、ちょっと想像したら分かるわよね？」

「……………」

僕が、一番嫌いな類の言葉だった。

「誰だって、普通に生きてたら、長谷川君と同じか、それ以上につらい思いを……………」

「そんなの、」

僕は思わず、言葉を遮った。そして、僕が今まで溜め込んできた思いを、二の句に告げようとした。僕はこの時、僕は先生を睨みつけていた。

ただの上から目線じゃないですか。

「……………長谷川君？」

「……………」

しかし、僕は何も言い出せなかった。

ああ、結局はこの人も同じだ。と、僕は思ったのだ。

何かしらの傷によって苦しんでいる人間に対して、社会のための

もつともらしい『道德』を持ち出し、「頑張れ！　頑張れ！」と無神経に叫んで鞭を打つ。そして、その人間が頑張れない意気地なしであること悟った時、失望の眼を向けて何処かへと行ってしまふ。イバラの鞭によってさらに傷を深めた、弱者達を残して。この人も、そういう無自覚な勝ち組の人間なのだ。

しかし、そこまで思っていて、それを口に出すことは出来なかった。口だけは動いて、声を出すことが出来なかった。喉が、言葉を紡ごうとする喉が震えていた。

それを口にしてしまったら、もう後戻りが出来ない気がした。

僕は、僕の主張をしっかりと伝える自信がなかった。僕の主張になされるであろう反論に、的確な言葉を返す自信がなかった。僕は、彼女からなされる反論に対して、しどろもどろになって言葉に窮する自分を想像できた。心の内を拙く発露した僕の言葉は、その拙さによって全く違う要約をされて、「それはただの戯言だ」という風に片づけられるのだ。そして、真剣な説教顔になった彼女からもっともらしい言葉を投げかけられて、「はい、僕が間違っていました」と涙目になりながら降伏する自分のはつきりと目に見えた。納得なんて、これっぽっちもしていない癖に。

ああ、僕は今までのように、意気地なしだ。

僕は、僕の主張を言えないことが辛かった。しかしそれ以上に、拙い言葉によって拙い人間に思われることが怖くて、恥ずかしかった。本当にそれは、耐え難い羞恥だった。

その時、もう何度目になるか分からない咳が、強く出てきた。普通のより強く咳き込み、思わずその場で屈みこんだ。マスクの中で咳と共に出された吐息が溺れるようにもがき動く。

ゴボ！　ゴボ！　ゴボ！

無様だ、無様だ、無様だ　惨めだ。

咳が収まり、下がっていた顔を先生の方に向ける。怪訝そうなような、思案しているような表情を先生は浮かべていた。

僕はどうしたら良いか分からなくて、しばらく固まっていた。し

かし、やがて一礼して、

「……失礼しました」

逃げ出すよう保健室から出て行った。ガラガラボタンと引き戸が閉まると、僕は早歩きでその場から立ち去った。

僕はガキだ。と強く思った。そしてこれからも、僕はガキであり続ける。

これだから、僕なんて人間は早く死んでしまうべきなんだ。ふと僕は、マスクの中で息がこもっているのを神経質に感じていた。眼鏡の端っこで曇りが生じたり引いたりしているのにも。

身もふたもない話をしておく必要があると思う。僕の歪んだ考えと、その考えを持つてしまうに至った経緯。それを話さないことには、多分僕という人間を理解してもらえないと思う。僕が、保健の先生が言ったような言葉を嫌いな理由も。

僕は、僕が見知らぬ人から最低の人間と思われることに対して、特別な感情を持つことはない。もっとも、僕が特別だと思っている人が相手だったら別だが、それは考えないことにする。

僕にとって耐え難いこと。それは、僕という人間を知りすぎないで、厳密には僕という人間の本質を知りもしないで、僕のことを好いたり嫌ったりすることだ。

だから、僕は今から語ろうと思う。例え僕の語ろうとしていることが、どれほど不快で、自己満足を満たすためだけのものではあったとしても。

僕は、語りたいから語る。ただ、それだけのことだった。

僕はこれまでに、肉親や他人からの色々な言葉や行動によって、精神的に傷をつけられてきた。そして、それらの積み重ねによって僕は自分でも嫌だと感じる性格になってしまった。

嫌だと感じる性格。通常から軸がぶれている性格。死にたく

なってくる性格。

僕の方にもいくらかの地があつたことは、認めざるを得ないのだろう。しかしそれらの歪みは確実に、僕を傷つけてきたたくさんの他人達や、それを脆弱だと暗に責めた両親が培ってきたものでもあるのだ。僕が実に素晴らしい土台であつたのを良いことに、彼らは遠慮なく土壌を放り投げていったのだ。ドカドカ、ドカドカと、矢継ぎ早に。それによつて土台にどのような歪みが生ずるかなど、考えることなしに。

人間は生きていれば、皆が平等に傷つく。皆が皆、人それぞれ違う痛みを背負つて生きている。なので、己のみが傷ついていると思つては絶対にいけない。

先ほど、あの保健教師が言つた言葉である。

これは、事実だろう。あるいは、真理と言つてしまつても構わないものでもあろう。

僕が受けてきた傷そのものにしても、その傷の付けられ方にしても、一般に比べて特に珍しい分類のものではない。

今時、誰しもが一度は『シカト』を経験すると言われているような社会なのだ。その傷を引きずっていないなどとは到底言えない自分ではあるが、その位のことは僕にだって分かつている。

しかし、だからといってそれが、物事を根本的な解決へと導くことはない。

僕が思うに、人はこの真理に対して盲目的に信仰し過ぎている。

僕たちにとつて、傷は傷なのだ。落としても落としても消え得ない、最終的には誰にも理解され得ない。そんな、半永久的に心へと落とされ続ける影なのだ。その見た目に相対的な差はあれども、傷を負った者にしてみたら絶対的なものなのだ。人物Aの言う『死ぬほどの痛み』を、果たして全人類の中の一何者が一切の相違なく体感し得るといつのだろうか？

人間 取り分け、彼女のような主張を、平気で他人に当てはめることが出来るような人間は、その辺りのことをまるで無視してい

るように思える。あるいは、そういうことに無神経になれる程度には、強靱（僕に言わせてもらえれば麻痺なのであるが）な精神を持っているのだろう。

彼らはその真理を受け入れることによって、他人の傷に対して狭量になっているのだ。

この真理を受け入れた人間達の言動を試してみるがいい。

皆が、誰だって、自分以外の人間も、そうである。

君の悩みなんて、世界のどこかで飢餓に苦しんでいる人に比べたら、よっぽどくだらない。

死ぬなんて言葉を簡単に使うな。死という言葉はお前が思っている以上に重いのだ。

だから……

頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！

れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！ 頑張れ！

何故だろうか？ といつも僕は疑問に思う。

何故彼らは、僕が、僕のような人間が、必ずそれを乗り越える強さを持つことを前提に話を進めるのであろうか？

僕の抱える問題が、それほどまでに高尚なものであるとは言わない。なるほど、世界の何処かで一切れのパンも食べられない子ども達が抱える問題の方が、よほど重大だ。しかし、僕はその程度の問題を乗り越えられない程度に、弱い人間ではあるのだ。それだって問題なのではないのだろうか？ いや、あるいはそれこそが、僕のような人間が抱える、本当の問題なのではないだろうか？

僕が、僕のような人間が、彼らにとっての『くだらないこと』で悩み、時として死にたくなったり、隣人を殺したくなるのは、その悩みそのものによってではない。僕のような人間は、その心の内に根付く、どうしようもない精神的弱さによって悩み苦しむのだ。

現代社会は、強くあることが、強くあろうとする姿勢が、生きていく上での前提条件になっている。弱さに対して、最終的には狭量なのだ。

彼らが見る、人の苦しみ、弱さには絶対という言葉は存在しない。あの人と比べたら、あの状況と比べたらという、相対こそが全てなのだ。

では、相対的に強くない僕は、強くあることが出来ない僕は、一体どうしたら良いのだろうか？ 絶対的な弱さに打ちひしがれている僕は？ そこから立ち上がることの出来ない、絶対的に弱い僕は？

それを思うたびに、僕は死にたくなるのだ。弱さが許されない社会、弱さを糾弾する社会 死にたくなってくる社会。

強くあることは、罪じゃない。むしろそれは、賞賛されるべきことだ。環境や才能によって格差はあるのかもしれないが、努力を、苦渋を、ひたすらに積み重ねながら強くなれた人間は、これは本当に、賞賛されなくてはならないとすら思っている。

しかし僕が悲しいのは、それに対して、弱い人間があまりにも排斥されすぎていることだ。弱い人間を賞賛せよ、と言っているのではない。ただ、最低限の許し、救いが欲しいだけなのだ。

強い人間と弱い人間、この両者間に格差が生まれることに、僕は不満を抱かないだろう、と思う。強い人間は見下ろし、弱い人間は見上げる。それはとても、自然なことだと思う。

ただ 僕はどうか、僕のような弱い人間を、弱いというただそれだけの理由で、踏み潰さないで欲しいと思うのだ。弱い人間を、僕のように進むことが出来ない人間を、踏み潰さないで欲しいのだ。そう、僕はただ、ほっという欲しいのだ。必要最低限な救いだけを置き土産に、どこか遠いところへと歩いていける強者は、歩いて行って欲しいのだ。

僕を踏み潰すことのない、どこか遠い場所。

僕がこのような歪んだ考え方（そう認識出来るだけの理性くらいはある）を持つにいたったのには、僕の過去に寄るものが大きい。はつきりと言ってしまえば、僕はイジメを受けていた。小学校入学時から、中学校の半ば辺りまでにかけて。

イジメを受けていた。そう言くと、微妙にニュアンスが違うのかもしれない。僕は僕以上に悲惨なイジメを受けてきた人間の話を、高校に入ってから聞いている。例えば、ある友人は入学早々に、数人の生徒達から集団リンチをやられたようだった。それが恒久的に続いたことは言うまでもないだろう。

それに比べて僕はと言えば、せいぜい『気持ち悪い奴』と影口を叩かれる程度であった。暴力は……特筆されるべき物はなかったと思う。よって、相対的には、直接的なものにしても間接的なものにしても、生ぬるいものであったには違いない。よって、僕がこのことを何時までも引きずっていることは、真理に照らし合わせると『甘い』ということになるのだろう。

そういうところじゃない、と僕は思う。僕の傷の本質は、そういう分かりやすいところにはないのだ。

僕は、この『イジメ』を受けていた期間　そしてその期間が終わってなお、嫌われている人間だったのだ。いや、他人にとって『嫌われてしかるべきと認識された』人間だったのだ。

僕にはいつだって『キモい』という認識が付きまとい、それが僕と他人との決定的な隔たりを作った。

おい、信吾、お前ボール取ってこいよ。ああ？　何か文句あるのかよ？　信吾の癖によお。

あはは、まああいつはキモいから、当然だよな。

っーかこっちに近寄って来ないでよ。こっちにキモいのが移っちゃうでしょ？

僕だって、いじめられていた当時に、全く『遊び仲間』がいなかった訳ではない。しかし、彼らと僕との間には、暗黙の上下の差があったのだ。彼らにとって『キモい』人間とは、ただ『キモい』と

いうだけで、見下されてしかるべき人間であるらしかった。

理不尽な境遇。

ここまでの話だけを聞いたら、あるいはそう思われるのかも知れない。しかし、彼らとしても、全くの不当な理由があった（少なくとも、僕と彼らの客観から見たとしたら）のだ。

僕は、他の生徒達と比べたら性質的に相違し、ある一定の能力すなわち、周りに順応する能力に欠けていたのだ。

つまりそれは、『集団的な普通』からかけ離れている性格と言えば、ピンと来てもらえるものであるうか？

周囲が感心を持つべき話題には関心を持たず、周囲は身に付けていて当然な能力は身に付けず、周囲が持ち合わせている距離感を測ることが出来ない。そしてそういった性質を、無自覚のうちに持ってしまったている自分。

要するに、先天的に要領が悪い人間であり、救われないことに、そのことに無自覚であった人間なのだ。

なので、周囲にそのことを指摘され、糾弾されて始めて、醜く慌てふためいた。その結果として周囲からますます乖離、最終的には排除されていく。『ばい菌扱い』などという境遇が、まさしく似合うような人間だったのだ。

当然のことながら、僕はそうである僕が嫌だったし、しかし嫌な性格を持つ自分であることも自覚していた。そして僕がそうであることを、『遊び仲間』や両親から、いつもいつも指摘され続けた。しかし、僕は最終的にはそれを修正することが出来なかった。彼らはそれに対して「どうしてそんなことも出来ないの？」となじり、僕はますますそのことに嫌悪していった。

長谷川君って、いじめられて仕方がないところがあるよな。

そして、高校に入っても、最も信頼している友人からこう言われる始末だ。よく発狂しなかったものだ、後になって真剣に思った。情けない情けない死にたい。その思いに対してにすら、「死ぬなんて言葉を簡単に使うな」と言って追い詰めたのも、他でもな

い彼であつた。彼はまさしく、社会のための『真理』を振りかざす、『頑張れ教』の典型的な信者であつた。

そんなことを繰り返すうちに、僕は何時しか捻くれてしまったのだと思う。そして、そんな自分に対して心の底で嫌悪感　あるいは罪悪感を抱いているのだと思う。

だから僕はもう、自分の性格を修正することに関しては諦めてしまっている。いや、どちらかと言えば、単純に嫌になつてしまっているのだ。臭い物には蓋。今でも僕がそのことを指摘される度に、人一倍に自己嫌悪をするのはそのためであらう。

そして、そんな僕が行き着いた先が、『真理』を受け入れられ、それを弱い人間に対して押しつける人間に対する憎悪だった。

彼らは結局、それを受け入れられて、それが心地の良いものだと考えられるような人間だからこそ、それに対して信仰を抱けるに過ぎないのだ。彼らは、『真理』をどうしても受け入れることが出来ない人間がいることを理解しない。そんな人間は、甘ったれの社会不適合者なのだと言弾する。彼らにとって『真理』は絶対的に正しいことなので、その『真理』に対して首を縦に振れない人間がいることをまるで理解しないのだ。

僕は、そんな人間達がはびこる世の中が窮屈で仕方がなかった。弱い人間が、弱いままで居続けることを許さない社会が、どうしても嫌で嫌でしょうがなかった。

それを自己解決するために非常に簡単な手段が、さっさと死んでしまうことであることを僕は理解していた。しかし、僕は死ねなかった。

死ぬことが逃げだと思つてゐる訳ではない。単純に、死ぬのが恐かったのだ。僕が本当に求めているのは、死そのものではない。永遠を思わせる悠久を思わせる、死のような安息だった。

これが甘えというものなのだろう、ということには分かつていた。しかし、それを分かつたところで、僕にはどうすることも出来ない。僕は望んで生まれてきた訳でもなければ、望んで僕として生きて

いる訳でもない。かといって、望んで自分を変えることも出来なければ、甘んじて僕を受け入れることも出来ない。そして、一番楽な解決手段である死も、ただそれが想起させる本能的な恐怖を拭えないという俗な理由で選ぶことも出来ない。

僕という存在の脆弱がもたらした、魂の立ち往生。

それが僕の傷が産み落とした、弱さの本質だった。

昼休み。僕は教室からカバンを持ち出し、理科講義準備室に入った。僕が所属している、新聞部の部室である。

昼食の弁当を片手に談笑していた三人の男子が、一斉にこちらへ顔を覗かせた。部員達 全員僕と同じ、二年生である。時計を見ると、針は一時近くを指し示していた。四時間目が終わって約二十分。普段の僕だったらとつくに食事を採り始めている時間だった。

「長谷川、何でカバン持ってたんの？」

と、扉に一番近くに座る男子 石橋が聞いてきた。彼の鼻声から発せられる言葉は、何となく間延びした感じに聞こえる。僕は薄い笑みを口元に浮かべながら「飯食ったら帰るから」と返した。石橋は「ふーん」と特に興味がなさそうな風に返事をして、再び箸を動かし始めた。僕はカバンを余っている椅子の上に置き、カバンから弁当箱と水筒を取り出した。

それから僕は、マスクを取り外した。「プハっ」と、大げさな感じに息を継ぐ。ひやりと心地よく感じる空気が、何物にも邪魔されることなく喉を通るのを感じた。

僕は水筒の麦茶を口に含んでから、弁当箱のフタを開けた。のり弁当。一口分、ご飯を箸でつまんで食べた。手放しに「うまい！」と言えるものではなかったが、それでもそれほど悪くない味だった。

部室 すなわち理科講義準備室は、僕を含めた部員達四人（高崎、幸田、石橋、僕）が、いつも昼休みの際に食事を採るときに利用する場所である。

六畳くらいの広さの部屋に、理科室にあるような水道付きのテーブルが一つ置かれている。コックが外れているため、この水道からは水を出すことが出来ない。「部室になる前はほとんど空き部屋同然だったらしい」とは、今は引退した先輩の言葉だ。室内は特別に汚いという訳ではないが、床に体育座りをして平気でいられるほどに綺麗な訳でもない。初めてこの部屋に入った時は、染み付いてるような生臭さを感じたものだった。先輩を含め、先代の新聞部員もここで昼飯を食べていたそうだ。

そのテーブルに、左右に二人づつ 僕・石橋と幸田・高崎で向かい合うように座るのがお決まりのポジションだ。しかし、間に四台のパソコンが置いてある都合上、向かいの席に座る人の顔はパソコンの隙間越しにしか見えなかった。また、そのパソコンというのが前時代的な、馬鹿みたいにでかい箱型のデスクトップパソコンで、テーブルの大部分をそれで取ってしまう。昼食用のテーブル代わりにするにはちよつと狭いのだが、キーボードをどかせば辛うじてどうにかなった。

向かいの高崎と幸田はニュースでやっていた大臣の不祥事の話で花を咲かせ、石橋はパソコンで作業をしながら弁当を食べている。僕はただ、黙々と食事を採っていた。この時ばかりは、マスクをつけないでいられる。弁当自体も、そんなに悪くない。僕は結構食意地が張るタイプの人間なので、ちよつとの風邪程度で食欲が失せたりはしないのだ。食事の時は大抵あまり話に参加せず、味わって食べるのだ。

しかし、この時もまた、咳の魔の手から逃れられる訳ではなかった。

ゴホッ！

ご飯とハンバーグを咥しゃくしていた時、軽い咳が一つ漏れた。それを皮切りに、次々と咳があふれ出てくる。だんだんと強くなっていくそれは、出すまいと思っても止められるものではなかった。

五、六回ほど出たところで咳が止まる。口元を押さえていた右手

は、唾液でグチャグチャになったご飯とハンバーグがかなり付着していた。ちきしょう。これでは全然進歩がない。

傍らに置いておいたトイレトペーパー（近くの便所からかすめて取ってきた物。うちの部活では、ティッシュペーパーの変わりにこれを使っている）を千切り、神経質にふき取った。思わずため息が漏れる。

「長谷川君、やっぱりまだその風邪酷いみたいだね」

その時、向かいから声が聞こえた。幸田である。他人行儀にも聞こえる呼び名だが、これが彼の常なのであまり気にならない。こういう時、気を利かせた言動を取るのは、大抵彼である。彼は、僕が最も信頼している友人である。

「まあね……」

もう一度ため息を漏らしながら僕は言った。

「結構長引いてるね、それ。いい加減のど痛いんじゃない？」

「うん……」

「まあ、今日は帰ったらゆっくり休みなよ。どうせ締め切りまではまだ時間があるし」

今月僕が担当している記事は二つ。毎号連載している先生へのインタビューと主張　いわゆる『社説』である。締め切りは終業式の二日前。記事の進行状況はあまり芳しくないが、確かにそこまで切羽詰っている状況でもない。むしろ余裕がありすぎて、仕事だらけがちになる時期でもある。

「でもどっちにしても、風邪だけは移さないでね」

と、幸田が苦笑い勝ちに言った時、高崎が声を上げた。

「そうそう、信吾菌が映ると男好きになっちゃうぜ！」

それに呼応するように、隣の石橋が、さらには先ほど気を使ってくれた幸田まで、

「うわあ！　そりゃ恐ろしい！」

「ヒイイ！　怖いよお！」

と、随分芝居がかった手振りを交えながらはしゃいだ。幸田は、

結構氣遣いが出来る人間である反面、部員の中で一番悪乗りをしやすい人間なのだ。『いじられ役』に慣れっこな僕は、ただ「ハハハ」と苦笑いを浮かべるだけだった。頭の奥で、何かが『クラッ』と来たような気がしたが、無視した。無視したほうが賢明だった。僕のような馬鹿でも、十七年も生きていれば学習能力の重要性くらいは学ぶことが出来る。こういう時に過剰反応をして、ロクな目にあつた例がない。

それからしばらく、僕は黙々と弁当を食べ続けた。六口か七口くらいの割合で咳がでて、そのたびに食事を阻害された。喉が酷く痛くなるのは相変わらずだが、もうご飯粒をテーブルに飛び散らせるようなヘマはしなかった。ご飯を半分食べたあたりで、ご飯の味に對して飽きを感じ始めた。醤油とかつお節で味付けされたそれは、結構単調で濃い目の味だから飽きが早い。時折、そのあまりの代わり映えのなさに嫌気が差しながら、それでもなお食べ続けるのは、腹が減った人間の悲しい性である。というか、本来は子である自分が文句を言えた義理ではないのだが。

幸田と高崎は、相変わらず話を続けているようだ。気がついたら石橋まで話に参加している。僕は自身の沈黙に咳を交えながら弁当をつまんだ。つまみ続けた。三人の愉快そうな笑い声が、狭い部室の中に高く響いた。

やがて弁当を食べ終わり、僕は再びマスクをつけた。再び生暖かい吐息がマスクの中を泳ぎ始め、眼鏡にも曇りが生じ始めている。窮屈で、気が滅入る閉塞感が僕の口の周りを覆っていた。

僕は何をするというでもなく、黙って肘を突いて座っていた。三人の間に広がる笑い話し声。僕はそれに交わらなかった。いや、交われなかったと言った方が正しいだろう。

別に彼らと気まずい関係にある訳ではない。しかし、僕はこうしている彼らとの間に、壁のようなものを感じざるを得なかったのだ。例えば僕が今、彼らの間に入ろうと何かを喋ろうとする。しかし、そのためにはそもそも何を喋ればいいのか分からない。

適当な相槌を打てばいいのだろうか？ 何か気のきいたことを言えればいいのだろうか？ それとも……それとも……。

こういう時、僕はいつも分からなくなる。そうして考えれば考えるほど色んなことが分からなくなってきた、終いには考えることが億劫になってしまふ。そして考えることを止めた後には、まぶたにへばりつく眠気のような気の重たさと、突然足場をなくしてしまつたような不安の念が残る。僕は今、非常に臆病な精神状態である。

本心を言つてしまえば、僕は別に彼らの輪の中に入らなくてもいいと思つてゐる。無理に輪の中に入ろうとして、的外れな発言をしてしまふほうがかえつてまずい。大体、ちよつと話に参加しなかつただけで、よつてたかつて僕をハブにしてくるほど幼稚な連中でもないのだ。そして何より、僕は今、一人でボーっとしていたい。

しかし、僕はこういう時、まるで幾多もの衆人に冷視されているような後ろめたさを、意識の底からくみ取らずにはいられなかつた。部室内に響く話し声や笑い声、自然体で屈託のない笑顔、心の底から打ち解けあつてゐるような彼らの空気……。そういったものが、たまに僕にとって無性に耐え難いものになるのだ。

繰り返しになるが、僕は彼らと気まずい関係にある訳ではない。むしろ、人付き合いが苦手な僕にとって、彼らは非常に貴重な親友だとすら思つてゐる。彼らは、学校内で孤独に対する自己防衛のために作る話相手とは違ふ。彼らは部活仲間であるのを抜きに考えても、非常に魅力的な人間だ。

だからこそ、なのである。僕が彼らに言いようのない後ろめたさを感じるのは。

僕は彼らから、色々なものを貰つてゐる。それは何気ない会話で使われる些細な笑いから、僕の人格を形成するのにおいて大いに影響を与えるであろう出来事まで。時々、僕が彼らと一緒に高校生活を送れることを誇りに思うくらいだ。

しかし、それに比べて自分はどうかだろうか。こういうことを自分でいうのもどうかと思うが、僕が彼らに与えられるものなんて、全

然ないように思われる。というか、実際にその通りなんだろうと思う。僕はほとんどの場合において、彼らの話に対し受動的なのだ。彼らが何かしらの意見を言っているのに対して、僕はただ阿呆みたいに頷くだけで。彼らのからかいに対しても、僕はただ朴念仁のように笑っているだけで。

要するに、『僕と言う人間』が必要とされているのではない。僕という『役割を担う存在』が必要とされているのだ。イジリのネタや対象になるという条件さえ満たしていればいいのだ。その条件さえ満たしていれば、極端な話、その辺のマネキンであつても構わないのだろうとすら思うのだ。

僕にとって彼らは数少ない、掛け替えのない友人である。しかし彼らにとつては、ただ道端に転がっているオモチャに過ぎないのかもしれない。それが僕の、彼らに対する後ろめたさであつた。

強い咳が何回が出る。風邪をこじらせてから咳をした数など、もはや数える気にならない。呼吸を整えるために、深呼吸をするように息を吸い、吐き出す。マスクの中に、息がこもった。生じる曇りによつて部分的にさえぎられる視界。果物の缶詰の汁が腐つたような臭い。僕は小学校の時、『いじめっ子』から言われたことを思い出す。

お前の息臭えよ、お前の息臭えよ、お前の息臭えよ……………。
そう言いながらケラケラと笑い、背中を蹴り飛ばしてきた連中。
こんなくだらないことに限つて、いつまでも心に残り続けるものだ。

「……………ね、信吾？ 昨日も夜な夜な男を掘つてたんだよね？」
その時、不意に僕に話が振られた。幸田の声。僕は反射的に「うん？」と返事をして、それからすぐにそのことを酷く後悔した。後悔するのと同時に、幸田の顔が破顔したのを確認した。

「うわあ、『うん』だって！」

幸田が、マンモスか何かを毬で捕らえたように騒ぎ立てた。さらにそれを受けて、高崎と石橋も「うわあ！」と、ニヤケ顔にバンザ

イの動作で、大げさな手振りでふざけた驚きを表現する。

「流石信吾じゃーん！ 昨日も、ヤナイの穴を掘って来たんでしょ？」

「は？ そんな訳ないじゃん」

完全に後手に周った形の僕は、それでも慌てて言葉を返す。あんまりにも、芸がなさすぎる返答。アサルトライフルを構えている兵士に投石で抵抗するがときに、無益で無様なりアクションであった。

念のために言っておくと、僕は決して男色ではない。ちょっとした気の迷いで、そういうキャラを演じてしまったのが運のツキだったのだ（その時は面白いと思ったんだ）。こういう人付き合いに關しては狡猾な彼らは、逆にこちらが食中毒を起こすほどにそのネタを利用してきていると言う訳であった。結局は自業自得なんだけれども。

それとヤナイとは、五人目の二年生部員である。彼は、基本的にクラスの方で食事を探っている。こういう時に、良く引き合いに出されることから分かる通り 部内での地位は、僕以上に非常に低い。

「え？ そんな訳ある？ うわっ、流石ガチホモじゃん！」

「いや、だから違うって。誰がそんな気持ち悪いことするかよ」

「いやいや、そんなに言わなくても分かっているって。信吾がヤナイに惚れてるってことくらい」

「いや、だから……」

きりがなかった。僕はため息をつきながら、脱力したように肩を落とした。誰のものか分からない、薄い笑い声が聞こえた。ついでに咳まで出てきた。喉が痛む。

こういう時、彼らは強引に僕にとって非常に困る方向に話を進めるのだ。部活メンバーが僕に対して行ってくるイジリの、典型的で、最もめんどくさい流れになりやすいパターンの一つである。こういうパターンでムキになった時、その先には『負け』という未来しか

なかった。

「うつわー！ まじキモイんだけどー！ さつさと窓から飛び降りるよー！」

「ところで長谷川君、最近、頭に地肌が目立つよね？」

「えー、ゲイな上にハゲとかマジ勘弁んだけどー！」

僕のことは置いてけぼりで、彼らはどんどん話を盛り上げていった。僕という存在が、まるで粘土のようにグチャグチャともてあそばれる。何故なら僕はそういう役割だから。いじられキャラという、部員全員が共有する人間製のおもちゃ。まるで赤子のおもちゃのように、無邪気に振り回され続ける僕。

マスクの中で息がこもる。息苦しさがマスクの中で漂う。

こいつらは良い。こいつらは良いさ。

僕の頭が、めまいのするほどの熱を帯び始めた。僕の頭が、ジワジワとグツグツに煮やされていく。僕は何時しか、机の下で右手の拳を固く握りしめていた。

ああ、こいつらは良いさ。こいつらは僕と違って、人並みの学校生活。人並みの友人付き合いを送ることが出来た連中なんだ。僕のように、特別にクラスから嫌われることもなく、友人を作ることが求められているのかを良く分かっているのだ。どういうことを言い、どういう表情を作り、どういう風に、僕のような弱者をこき下ろせばいいのかを。

確かに彼らは彼らで、小中学校で苦労した来たことは知っている。特に幸田と高崎は、陰湿なイジメがゲーム感覚で横行していた中学校にいたという。幸田の方は一時期、不注意な発言からその対象にされていたこともあった。しかし、それでも彼らは、それらを経験として消化できる程度に豊潤な精神力を持っているのだ。僕と違って、彼らにとってそういう経験は、平穏だった日常に落とした一時的な影に過ぎないのだ。少なくともそれを、外界に対して発露することはない。それだけの、精神的な成長をしているから。それを

成し遂げるだけの強固な土台を持っていたから。僕に対して行われたイジメが日常的で、精神そのものを捻じ曲げるものであったのに対して。僕の根性を、根こそぎ奪い去ったものに対して。

彼らは、ヒューマニティ的な能力を身に付けた、自覚的な権力者なのだ。彼らはこういう時、場の雰囲気 人の考えていることを理解し、それを特定の方向に持つていく力を持っている。そしてそれをもって、場を高揚させるための扇動的な行動を取れる。あるいはそれに上手く順応出来る。そんな彼らに対して、親や学校の言う常識や道徳は通用しない。そんなものはただ、鼻であしらわれるだけだ。その癖に彼らは、必要とあらばそういった概念を上手に使ってくる。ましてや弱者の心など、平気で踏みにじるのだ。エンターテイメントとしての、弱者の踏みにじり方を知っているのだ。

机の向こう側の幸田と高崎が、ニヤニヤと笑っている。隣の石橋もギャハギャハとはしゃいでいる。そして僕は憤怒と羞恥に震えながら、固い握りこぶしを作つて悶えている。

僕は思う。これが、構図なのだ、と。

人間に関して怜悯な連中が、自分達の満足の為に、僕のような愚図な人間を好き放題に弄ぶ。そして連中は笑い満たされ、愚図は慙愧し苦渋を飲む。弱肉強食とはまさに、こういうことを言うのだろう。それは地球のように自然なことなのだ。

それは間違つたことじゃないんだ、と僕は思っている。何故なら、それが自然に生きるということだから。自分が何かに対して充足している時、その影で誰かがその何かを得られなかったがために涙を流している。人はそういう生き方しか出来ない。

でも、僕はそんな世の中が息苦しかった。弱い 精神的に未熟であるということは、そんなに罪深いことなのだろうか？何が何でも、排斥されなくてはならないものなのだろうか？

この世界は、精神的な弱者に対してあまりにも冷酷すぎる。そういう人間は、社会的に排除されていく。世界（あるいは権力）に取つての理解の範疇を超えるもの 例えばイジメの対象になる人間

のような『弱者』が、排斥され不幸になることに対して、あまりにも冷酷なのだ。何かの拍子で「ちよつとこれは可哀想だよ」などというばやきによって、ちよつとした罪悪感が発露することはあるかもしれない。しかし畢竟、最終的には彼らを排斥する側に戻ることから、「そうなることが当然である」と考えるのだ。それが、そう考えることが間違いであると思うことは　ちらりという微量なものですらありえない。

僕が欲しいのは完璧な平等なんかじゃない。僕が欲しいのは、どのような人間にも、吐き気を催すような業を背負った人間にも与えられる、祈りのようにささやかな救いだった。

三人はまだ笑い続けている。権力者と、その権力におもねることが出来た人間達の、弱者を伴った笑いを続けている。

僕は、こんな構図で回っている世界が窮屈で。僕のように脆弱な人間に、全然救いがもたらされない世界が窮屈で、窮屈で、キウウクツデ……

鈍い打撃音が、部屋中に響いた。笑い声がやみ、三人の視線が一斉に音のした方　僕の方を向いた。シンツという音が聞こえてきそうな、静寂。

僕は、自らが叩きつけた右の拳を見て、すぐに、さっと顔が青ざめた。

ああ、しまった。

「は、長谷川君。冗談だよー。そんなに怒らないでよー」

幸田が、場を取り次ぐような声を上げる。高崎が、白眼を浮かべながら顔をそむけた気がした。石橋が、苛立ちを包括した無表情になった気がした。

“ 気がした ”

怖くて、あまりにも怖くて、直視なんて出来なかった。

僕は、叩きつけた右手で大げさに頭を掻きながら、必死の思いで笑顔を作った。

「い、いやー参ったなあ。ごめんごめん。本当、何やってんだらう

ね、僕」

ははは、参ったなあ、はははと、僕は乾いた笑いを発しつつけた。誰も何も言わない空間内で、笑い声だけが無駄に高く響く。

本当は、分かっていたのだ。最初から全て冗談であったことくらい。これくらい、僕たちの間では当たり前になっていることじゃないか。場を和ませるためのイジリなんて、全然悪いこと何かじゃない。むしろ、こんな風にムキになって、変な行動を起こした僕の方がよっぽど、最悪だ。

何が、救いが欲しいだよ。

僕はまたしても死にたくなった。

それを、軽率に手放しているのは、他でもない自分自身じゃないか。

その時、昼休み終了五分前のチャイムが鳴った。僕は弾かれるように、「やつべー。もうこんな時間か。早く帰らなきゃ」と早口に呟きながら、弁当箱と水筒を鞆にしまい、すぐに鞆を背負い、早足にドアノブを回して表に出た。

「じゃ、僕もう帰るから。悪いけど部活の方頑張つてねー」

僕はそう言つと、軽く手を振つて扉を閉めた。早歩きで、玄関に向かつて、廊下を早歩にで歩く。鉛のような心臓がバクバクと重く高鳴り、歩みを進める足は死後硬直のように強張っている。

何で、僕は、いつも、こうなんだ。

マスクが無性に息苦しくて取り外す。途端に咳がとめどなく溢れ出てきて、すぐにマスクを付け直した。

マスクが、息苦しい。

結局この日、家に着いたのは二時ごろだった。

帰宅途中で再び症状が悪化したため、帰宅してすぐに風邪薬を飲み、ジャージに着替えて眠りについた。薬の力か容態の悪い体調の影響か、僕は布団に入って目を閉じると、たちどころに眠りに落ちた。随分と、深い眠りだった。

目を覚ましたのは七時ごろ。特に具合の悪い感じはしなかった。むしろ大分身体が軽くなった気がした。体調が、限りなく全快に近づいているのを感じた。ただし、咳はいまだに出ているのだが。なので取りあえず今日は、終日マスクをつけることになるだろう。

それから食事を探り、薬を飲み、風呂に入り、久しぶりにパソコンの電源を入れた。椅子の近くでストーブがついていて、僕の体をあぶるように暖めていた。暖房と同じ理由で、僕はストーブが嫌いだった。いや、暖房と比べて非常に直接的な暖め方な分、暖房以上に嫌いだった。一通り巡回先のサイトを回った後に行くのは、いつもの動画サイト。どうせ他に、趣味らしいものもない。いつしか父は、「おやすみ」の一言とともに二階に上がっていった。母親は、椅子に腰をかけて二時間ドラマを見ている。水曜ミステリー。ちなみに僕と母は両方リビングにいるのだが、ちょうどお互いが死角になるような場所にいる。こちらとしては心もとない感じがするが、一応、一定のプライバシーは保たれている。

僕は特にこれといったものを見ている訳ではなかった。適当に上がっていたものを適当に目を通すだけ。それが面白ければ笑うし、つまらなければすぐに見るのをやめる。そして、特に興味を惹かれなければ、そもそも目を通そうとすらしない。それはとても、幅の狭い世界だった。二時間ドラマをとってもつまらないものだと思う僕ではあるが、自身の行為の退屈さに関しては僕も母のことを言えた義理ではなかった。

無為な時間を過ごすための、色のない世界。時間という唯一無二の価値を、いたずらに朽ちさせるための時間。退屈とは、愚かな人間の背負う宿命であり、業である。

気がつけば時刻は、十一時近くになっていた。

そんな時、背後から母親から声がかかった。

「信吾、ちょっとやつてもらいたいことがあるんだけど」

「ん？ 何？」と返事をしながら立ち上がり、母親の手に持っているものを確認した。

「ねえ信吾、ちょっとケータイで曲を取ってもらいたんだけど」

僕はため息をつきながら、

「ねえお母さん、僕さ、前にもやったよね？　そういうの。いい加減やり方覚えてよ」

「ええっ、そんなの忘れちゃうよ」

「だったらせめて少しは調べるとか……」

「そんな暇ないわよ。私だって普段、家事とかで忙しいんだから」
僕はもう一度ため息をついた。まったく、これだからおばさんってのは面倒くさい。

僕もいずれはこうなるんだろうか？

そんな嫌な想像が、僕の脳をよぎった。僕のようなつまらない人間が老いた時、それはそれは醜いことになるだろう。

「分かった。じゃあ教えながらやるから。良い？」

「うん、分かった」

僕は母親の携帯を受け取り、画面を開く。機種は、ドコモの比較的古い奴。パツと白い光を放ちながら、待ち受け画像が浮かんできた。赤い色の花をバックに、カレンダーが表示される。デフォルトのまま。これに関してはまあ、僕も似たような状態なのであまり人のことは言わない。

そして僕は、説明を始めた。

「いい？　まず、このボタンを押してiモードを開いて……」

「iモードって何？」

母親の、邪気のない声。分からないものは分からないのよという、悪気など微塵も感じさせない声の色。僕の眉間がピクッと動いた。

まずはそこから。それがおばさんというものだ。

「……まあ簡単に言えば、携帯版のインターネットのようなものだよ」

実のところ僕も正確な説明を出来るほどの知識を持っていないため、簡単に説明をする。多分それほど間違っていないはずだ。僕はパソコンばかりやっているため、携帯はあまり詳しくないのだ。

「え、それってお金かかるの？」

僕は思わず、「はあ？」と声をもらしそうになった。こいつは今更何を言いだすんだ？ 百歩譲ってiモードはやらないにしても、メールくらいはやってるんだろ？ 普通に考える普通に。

「そんなのあたりまえじゃん」

「え？ ちよつと待って？ ひよつとして曲を取るのもお金が必要なの？」

「……あのさあ……」

僕は頭が痛くなった。咳が漏れて、憂鬱になる。何なんだよ一体。おばさんって人種は、ここまで頭が悪く出来てるのか？ 学生時代、果たして母親はまともな教育を受けたのだろうか？

「……番組で、無料配信とかなんとか言ってた？」

「言ってなかったけど」

「じゃあそういうことだよ」

いけない。そう思いながら、僕は声が荒がるのを抑えることが出来ない。

「仮にお母さんが曲を配信する会社の人間だったとして、タダでそれを配信するか？」

抑制の効かない感情が、僕の眉の根をよせさせ、眼光を鋭いものにする。ああ、やつちやったよ、俺。そんな思いが全身にズシリとのしかかりながら。

それを真っ向から受けた母の表情が、驚いているような、怒っているような。どこか悲しんでいるような、そんな風に歪む。

「……悪かったわよ。じゃあ別に良いから、続けて」

僕はため息をつきながら、再び携帯の画面に向き合った。まだ、iモードにすら繋いでなかった。

僕は「いい？ ここのボタンを……」と、再び同じことを言いながらiモードを開いた。しばらくして、マイメニューやらメニューリストやらと、色々と出てくる。正直、僕もあまり開かない。僕は、携帯は本当に全然いじらないのだ。

と、ここまでやって僕は、ふと根本的なことを母から聞いていないことに気がつき、「そういえばお母さん」と、そのことを尋ねた。「曲は何を取りたいの？ その曲は番組のサイトで配信してる奴？」僕の質問の意味を分かりかねたらしい母は、「うーん」と少しばかり逡巡してから、それがドラマで流れていた曲であり、かつ番組で配信しているものであることを言い、それからその曲名を言った。「で、念のために、出来ればアーティスト名も知りたいんだけど」「ええつ。そんなの分らないよ。だって英語だったんだもん」

そんなの当たり前でしょうと言わんばかりの、のん気な声。確かに、番組で配信してる奴なら、特に問題はないだろう。恐らく、それ専用のコーナーが用意されているだろうから。

しかしそのあまりにも悪びれていない言い方は、僕の頭をジワジワと焙った。

こいつは、もしその曲が番組で配信されているものでなかったらどうするつもりだったのだろうか？ それだけならまだ見つけようがあるが、歌のタイトルが『桜』だとか『卒業』だとか、同名のそれがいくらでもありそうなそれだったとしたら、一体どうするつもりだったんだ？ 僕は数十もある候補の中から、しらみつぶしに調べなくてはならないか。

まさかこいつは、僕のことを若者であるというただそれだけの理由で、携帯のことなら何でも知ってる人間だとも思ってるのだろうか？ そして、仮に知っていたとして、どんなにめんどくさいことでもやってくれるスーパーマンのような人間だとも思っているのだろうか？

だいたい、こいつが取りたい曲とやらは、てめえで気に入ったんだという曲なのだろう？ 英語だろうが何だろうが、少しはアーティストのことにも神経を使ってたっていいんじゃないのか？

マスクの中の熱い吐息が、僕の口の周りを蒸らしていた。僕の頭は、ドロドロに真っ赤で熱い感情によって茹で上がっていた。

「……じゃあさ、その番組のサイトの行き方は分かる？」

「え？　それが分からないから聞いているのに……」

「そういうのを配信してる番組は、番組の最後とかにそこへの行き方が出てくんだよ。例えばドコモだったら、メニューリスト　TV／ラジオ／雑誌　……みたいな感じにね」

「そ、そんなの知らないわよ。いちいちそんなところまで見ないし」

「じゃあ、何でその曲が番組で配信されることを知ってるわけ？」

「それはテレビで見たから……」

「まさかお母さん、番組のサイトで曲を配信しますって言うておいて、そこへの行き方を教えないような間抜けな番組があると思ってる？　お母さんって、そんなことにも頭回らないくらいに頭悪いわけ？」

「そんなの……」

「っていうかさあ、行き方も分からないようなところを探させようって、ちよつと無神経すぎない？　僕だって、携帯のことなんて全然分からないだよ？」

言いすぎであることくらい、分かっていた。本当にその辺りのことが分かっていないから、母は僕を頼っているのだ、ということもだいたい、最初から行き方を知っていたとしたら、最初から僕を頼りはしないだろう。それに、行き方など聞かずとも、番組のサイトに行くことくらいなんということはない。TV／ラジオ／雑誌辺りから適当に探しさえすれば、簡単に見つけられる。深くつつこみさえしなければ、母のようなおばさん連中が考えているよりも、携帯の扱いにはるかに簡単なのだ。

しかし、それでも僕にはもうどうしようもなかった。僕は僕の怒りを、母にぶつけなければ気がすまなかった。なんで　なんでこの愚図はこんなことも分からないんだという苛立ち。僕は、僕の抱えている弱者への軽蔑への軽蔑が、こんな風に簡単に崩れることを思い知った。もっとも、本当は最初から分かっていたのかもしれない。結局この僕の考え方は　僕の自己防衛のために築いた、砂上の楼閣であるのかもしれないのだから。

だから 僕はもう、感情によって吐き出されんとする言葉を、止めることが出来ない。

「そうやってすぐに人に頼る前に、他に気を使わなきゃいけないことがあるんじゃないか？ ああ？」

そう言っただけ僕は、母親のことを睨みつけてやった。愚図に対しての苛立ちを一切隠すことなく、ただただ槍のような眼光を持って母の顔をねめつけてやった。

もう、僕の視界には、怒りしか映らない。

「……いい加減にしてよ……！」

母の瞳が、怒りに歪んだ。しかし、ただ鋭敏なだけのそれではなく、純度の高い悲哀が混じった、それ。救いようのない『罪』を犯した、自分の愛する人間に向けられるような感情だった。

状況が、非常にまずい方向に流れ始めている。まるで不気味な化け物が、おどろおどろしい足音を立てながらこちらに近づいてくるように。

「ねえ、私だって、自分で出来るんなら自分でやってるのよ？ でも、私じゃ全然どうしたらいいかわからないから、こうして詳しくそうなあんたに頼んでるだけじゃない！」

「だったら、少しは自分で出来るようになるように努力しろよ！」

「だからそんな暇なんてないって言ってるじゃない！ 私だってね、普段家事やら何やらで忙しいんだから！」

「だから、今こうしてお母さんに教えてるんだろ？」

「だって分からないんだもの！ 私はもう年なんだから、物覚えだつて悪くなるの！ お願いだから分かってよ！」

「何でだよ？ こんなのは簡単なことだろうが！ ボタンを押してiモードを開いて、目的のサイトを選んで探して……！」

「だから私にはそれが難しいの！ そうやって、自分を基準に物事を決めないで！」

「そんなの……！」何かを言い返そうとして、しかし二の句が告げられなかった。「私にはそれが難しい」。それを言われてしまった

ら、僕にはもう何も言えない。

僕が　不配慮だった？

「ねえ、出来ないなら出来ないって、教えられないなら教えられないって、ただそれだけを言えば良いだけの話じゃない。そうやって自分の思い通りに物事が運ばないからって、八つ当たりみたいに怒ったりしないでよ！」

僕はカッと目を見開く。何だよその言い方は？　まるで、僕が自分勝手なガキンチョみたいな　みたいな？　僕の頭が、ロープ上の人間のようにグラグラと揺れ動く。

だって実際　母の言う通りじゃないか。自分の物差しで勝手に「これくらい当然だろう？」という基準を決めて、それを押し付けた。そして、それをやぶった奴に対して、こちらで勝手に愚図判定をつける。

ああ、まさにガキンチョ。人のことを考えられない、自分勝手な駄々っ子。ああそうだ。客観的に見ても、これは僕が全部悪い。

でも、でも、でも……僕はそれを、認めたくなかった。

何で、何でこんなことも分からない？　自分の馬鹿を人に押し付けるな。そんなんだからあんたはおばさんなんだよ。

そんな稚拙な怒りの感情が、僕の頭をグルグルと低回して頭から離れない。

納得しろ、僕が悪い。僕は土下座をしてでも謝らなくてはならない！

理性的な僕が、そう言う。

納得できない、僕は悪くない。コノクソババアブッコロス！
感情的な僕が、そう言う。

絶対に相容れない感情と感情が、僕の頭の中で熾烈にせめぎ合う。そう、僕の脳みその中を、ドロドロの肉塊に変えんとはかりに

せめぎ合う！　せめぎ合う！　せめぎ合う！

そうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうしてそうして………！

グルグルとガチャガチャとグチャグチャとメキメキとグシャグシヤとガタガタと………！

沸点に達した煮詰められた僕の頭は、しかしその湯気の逃げ場を見つけれなかったが故に、収集がつかなくなっていた。このままだと僕は、気が狂いそうで狂いそうで狂いそうで………！

だから僕は、

「ああ、悪かったよ………！　僕が、全部悪いんだろうがよお！」
謝った。怒鳴りながら、謝った。

ああ、僕が全部悪かったよ。そういうことにしておいてやるよ。だから、もうこれ以上何も言わないでくれよ！　僕には　高校生にもなつて、駄々っ子のガキンチョ並の精神年齢にしか至らなかった僕にはもう、どうしたらいいか分からないんだよ！

だから………もう、止めてくれよ！　頼むから、止めてくれ！
でも、母は、

「また、そうやって嘘をつく！」

止めてはくれなかった。ここで終わるには、お前の愚かさに不相応だと、母は怒鳴り、続行を叫んだ。

そうして叫ぶ母親の瞳には、涙をさえ浮かべていた。愚かな息子と相対しなくてはならないという、ぶつけどころのない哀しみが発露した雪。

止めてくれ、そうやって、僕の愚かさに涙するのは、止めてくれ………！

怒りやら、恐怖やら、泣き出したいやら、生存本能やらで………もう、僕の感情は、訳が分からないものになっていた。

「そうやって、本当はちつとも悪いって思ってたにくせに、信吾はそうやってすぐ、全部かかってる振りして自分が傷つかないようにしようとする！ 人の言うことを受け入れるのが怖いから！」

「違う……！」

「だいたい、そのマスクの時だってそうだった！ あんたの『マスクなんてつけたくない』なんてわがママが叶わなかったからって、お母さんに、扉に当り散らした！」

「違う、違う……！」

「違う！ 信吾は本当は反省なんてしてない！ そうやって仮初に謝って、自分だけを可愛がって自分を守る！ 信吾は 自分の非を認める気なんて、これっぽちもありはしないんだ！」

「違う！ 違う！ 違ううう！」

僕は頭をかきむしりながら、首を激しく横に振り続けた。

怖かった。これ以上母の言葉は聞きたくなかった。これ以上母の言葉を聞いてしまったら、母から語られる真理を聞き入れてしまったら 僕という存在が、跡形もなく霧散してしまいそうな気がした。

「何だよ、何でそんな、そんなことを、平気で言えるんだよお！ じゃあ僕は一体どうしたらいいんだよ！ 土下座すれば満足かよ！ 腹でも切って死ねば満足かよ！ なあ、教えるよ、教えるよおお！」

僕は、自分を破滅へと追い込まんとする悪霊を追い払うがごときに、自分の感情を叫んだ。まるで、こちらに突っ込んでくる戦車を目の当たりにした原始人のように。

そう、僕はただ、分からないだけだった。僕は、いつもそうだった。

僕と話をする相手が、僕と関わる人間が、どんなことを考えてるのか、何を望んでいるのか、それが分からなくて。ちつとも分からなくて。その癖に、僕以外の人間はみんな、みんなみんなみんな、当たり前のように分かっていた。だから僕は、気がついたころ

にはみんなから乖離していて、排斥もされていた。空気が読めない。そんな風に言われても、じゃあ空気を読めるとはなんなのか、僕には答えを出すことが出来なかった。

僕はいつも、自分のことしか考えていなかった。人が話をしていても、一緒に何かをやっている時も、どこか上の空で、自分の空想の中に閉じこもっていた。それは恐らく、とても暗くて、狭い世界なのだと思う。でも、僕はそれで満足だった。その中に、無粋な他人が入り込んでくることを、何よりも嫌っていた。

僕はみんなに対して何もしない。だから、どうかみんなも僕に何もしないでくれ。

それが、僕のささやかな祈りだった。

何で？ それは、それが僕にとつての自然だったから。

考えなくなかったから考えなかった訳でもなければ、考えるなど教え込まれたから考えられなかった訳でもなければ、何か特別なことがあったから考えられなくなった訳でもない。

そうであることがただ、僕にとって当たり前だったから。

でも、周りはそんな僕を許さなくて。自分のことだけを考えるなど、そんなお前は愚図なんだと、僕のこと責めてきた。結局のところ、絶望的なほどに周りが見えていない僕には、周りに対して違和感を抱かせないような行動を取り通すことは不可能なのだ。

じゃあ、考えるようにしようと僕が起こした行動は、いつもおっかなびつくりな挙動で、後ろ指を差されながら笑われた。

何で？ 何で？ 何で？

分からなかったから。分からなくて、あみだクジを引くような気分ですと接してきたから。接しざるをえなかったから。でも、どうしたらいいかを教えてくれる人がいなかったから。いや、教えてくれた人は全て、僕という性格の否定を前提に講義をしたから、ある時は大いに絶望して、ある時は大いに逆恨みをしたから。

だから、僕は、人が怖かった。そしてそれ以上に、そんな風にビクビク生きている自分が、嫌いになった。

僕にはもう、どうしたらいいのか分からない。どうしたらいいのか、分からない。

荒い息を、マスクの中に吐き出す中。僕の中で、だんだんと怒りの感情が薄れていつていることを自覚する。そして胸に残ったのは、底の見えない悲しみの情感だった。

絶対に出て来るだろうと思っていた涙は、一滴たりとも出てこなかった。こらえるという拳動を動かすだけの、感情の揺さぶりすら起こらなかった。

ああ、何でこう、自分は、どうしようもないんだろう。

その時、僕の中に、他人としての僕が生まれ出た。こういう時、必ず僕の中に、こういう自分が生まれる。それはきつと、現実からの浮遊なのだろうと思う。自分を、自分だと思わないことで自分を守る、魂のエマージェンシー・エスケープ。

他人としての僕は、まるで幽霊のように僕の身体を抜け出て、僕の今の姿を見た。他人としての僕が見る今の僕の姿はまさしく、自分の思い通りにいかないことを泣き叫ぶ、駄々っ子の姿だった。

僕は、こんなところで、何をやってるんだろう？

それも、全部僕がいけないんだな、と僕は思った。母に愚かな自分を曝け出してしまった、どうしようもなく暗愚な自分が。

「お母さんは……悲しいよ。信吾が、こんな風になっちゃって。ねえ、どうしてそうなっちゃったの？ お母さんの何が悪かったの？ ねえ？ ねえ？」

母は、もう、怒りの表情を浮かべていなかった。ただただ、僕をじっと見つめながら、涙を流していた。彼女の僕を見る瞳には、どうしようもなささを漂わせる、哀れみの感情をさえ包括していた。

ああ、僕はやっぱり、駄目なんだ。

僕は、そんな母の姿を見て、そんな風に思考した。それは、感情というより、思考だったのだ。そんなのは、分かっていたことなのだという、思考。

僕は、失敗の人。会う人会う人を、僕の拙い言動によって不快に

していった、僕は失敗の人。終いにはこうして親にまで嘆かれた、僕は失敗の人。さつさと死んじやったほうが、これ以上惨めな思いをしない、生命失格。

僕という存在が、情けなくて、情けなくて、情けない。やはり僕には、死という状態がぴったりだった。

……でも

僕は思ったのだ。それでも僕は、生きなくてはいけないのだ、と。失敗の人として、生きなくちゃいけないだ、と。

何故なら僕は、逃避のための死を選べない、臆病な人間だから。僕がどんなに生を望まなくても、死という言葉の響きが放つ恐怖からは逃れられないから。

それは、生命という名の呪いだった。

僕の脳みそが紡ぐ、エセニヒリストな思考は、最終的には死からの原初的な回避を促していた。

僕の胸を打つ心臓の一鼓動一鼓動は、生きなくてはならないという暗示のリズムだった。

そして、その呪いを産み落としたのは、他でもない両親だった。

そして、その一翼である母が、僕を失敗だと言って嘆いている……。

失敗だと、認識された僕。失敗だと、認識している僕自身。

それでも僕は、生きなくてはならないのだ。

例えば僕が失敗でも、不良品でも、他人を不快にさせるだけの存在だったとしても 後ろ指をさされながら、生きなくてはならないのだ。

何故なら それが人間という、少なくとも、僕という人間の、生命なのだから。

ふざけんなよ。

僕の中に、マグマのような感情が湧き上がってきた。

僕だって、僕だって、僕だって……

自分から望んで、僕のような人間になった訳じゃない！

僕は、さめざめと泣き続ける母の胸倉を思いっきり掴んだ。「きやつ！」という短い悲鳴。悲しみに、驚きと怯えが混じった母の瞳を、睨みつける、睨みつける、睨みつける。まるで、僕から全てを奪った、諸悪の根源と対立するかのように。

「だったら……馬鹿な僕のこと、そんな風に悲しむくらいだったら……！」

僕は今、絶対に言うてはいけないであろう言葉を言おうとしている。

でも、それが何だというのだろう。

僕は確かに、失敗作だ。失敗作だからこそ、色々な惨めな目にあってきた。死にたい、死にたいと、数え切れないほどに思ってきた。それは、きつと、僕のせい。

でも、愚かな僕という罪の根源は両親、父と母にあるのだから。この二人がいなければ、僕という愚かな人間は、産まれることがなかったのだから。

だから僕は、禁忌を犯す。何の躊躇もなく、なんの罪悪感もなく。

「最初っから僕なんて産むんじゃねえ！ こちとらありがた迷惑なんだよ、馬鹿野郎！」

母の目が見開かれ、急速に瞳から光が失われた。何が起ったのか分からない、分かりたくない。そんなことが言いたそうな、表情。しかしすぐにその瞳は、一点の感情に収束された。それは、怒り。心臓や脳幹のように、本当の致命的な部分を、ハンマーで思いっきり殴られた人間の怒りだった。

「シンゴオオオオオオオオオオオオ！！」

叫んだが先か、ことが起きたが先か。僕は気がついたときには、左の頬に強い衝撃を受けると同時に、床に叩きつけられていた。

僕はしばらく、何が起こったのか分からなかった。マスクの中で、熱い息が吐き出されたり、吸われたりしいている。そして僕は、デウス・エクス・マキナのような唐突さで、僕は母に殴られたのだと悟った。

悟った。

僕はスクリと立ち上がり、母親に背を向けた。背後からは、母親の嗚咽の声が聞こえてきた。僕は音もなくリビングから出ていった。それから、ペタペタと足音を立てながら階段を昇って、僕の部屋に入った。そして、打ち上げられた魚のように、布団の上に身を投げ出した。

今度こそ、涙が出てくるだろうと思った。しかし、涙は一滴も出てこなかった。落涙を促す感情さえ、滴れきたりとも出てこなかった。じゃあ、きつと笑いが出てくるのだろうと思った。どちらかといえば、そっちの方を出したい心境だった。僕は、無理やり、「ハハハ」と笑ってみた。それはとても乾いていた笑みだった。そして、全く自発的ではない笑いだった。そんな自分が空しくなって、僕は笑いを止めた。そして僕は今、自分が何も感じていないことを悟った。呆れるほどの、無感情の中にいることを悟った。そして僕は、その中で、もう一つのことを悟った。

今こそが、死ぬべき時なんだろうな。

僕は、透明のような存在感のなさで立ち上がり、おもむろに机からハサミを取り出した。本当はカッターの方がよかったのだが、あいにくカッターはなかった。下に降りて、取りに行くのも馬鹿馬鹿しい。それに、ハサミだって刃物は刃物だ。きつと、気持ちの問題なのだろう。

気持ちの問題。この時、何故か僕は元プロテニスプレイヤーである松岡修三のことを思い出した。僕の行く動画サイトで結構見かけるのだ。頑張れ頑張れ！ 気持ちの問題だ！ そんなテンプレートな励ましの咆哮が、むしろいいとおしい。

今生の別れに望む上で思い出すことがこんな下らないことだなん

てと、僕は笑った。小さく乾いたものだったが、今度こそ本当の意味での笑いだった。

僕はハサミを手首に当てた。ひんやりとした感触。しかし、僕はこれ以上それを引くことは出来なかった。

僕の脳裏に、手首から鮮血が噴水のように飛び出てくる様を、そしてそこから発せられる死に至る激痛を想像したのだ。客観的に考えたらその想像は滑稽なものだった。しかしそれは、僕の無感情よりもよっぽどリアルな想像だった。

僕はとても怖くなって、ゴキブリを振り払うように、そのハサミを机に投げつけた。僕は枕を掴んで、それを思いつき壁に叩き付けた。叩き付けた。叩き付けた。でも、怖くなって止めた。この音を聞きつけた両親に、やってこられては面倒なことにならんない。

僕は「うつつ！」と唸りながら、ベットに倒れこんだ。

僕は、涙を流さなくちゃいけない。涙を流さなきゃ、嘘なんだ。

僕は心の中で呟きながら、目頭に力を込めた。少なくとも、それだけの感情が起らないことには、絶対におかしいのだと思った。でも、どれだけ力んでも力んでも、そんなものは全く出てこなかった。本当に、欠片ほども発現しなかった。

僕は、呆れるほどの無感情だった。僕はその事実に悶えた苦しんだ。

何でだ　何でだよ。

母の言葉が、僕の頭の中でリフレインする。

本当はちっとも悪いって思ってたにせよ、信吾はそうやってすぐ、全部分かってる振りして自分が傷つかないようにしようとする！

そうやって仮初に謝って、自分だけを可愛がって自分を守る！

信吾は　自分の非を認める気なんて、これっぽちもありはしないんだ！

何だよ、これじゃあ本当に母の言う通りになっちゃうじゃないかよ！でも分かってるんだ、これが本当のところなんだって。僕はいつだって無反省で、自分だけが可愛くって……でも、悔しくないのかよ、ここまで本当のことを看破されて、少しは悔しくないのかよ！僕だって反省をしなくちゃいけないってことくらい分かってるのに！反省をするべき立場にいるって分かってるのに！だったら、泣けよ！こんなクソみたいな自分を恥じて、少しは泣けよ！泣けよ！泣いて、少しはポーズくらい取って見ろよ、それだけの感情の動きを見せてみるよ！なあ、なああよ………

でも、僕は結局泣くことが出来なかった。残ったのは、どうしようもなく息苦しい、精神的な閉塞感だけだった。

僕は思い出したように、マスクを取り外した。しかし、外したとたんに激しい咳が溢れてきたので、僕は慌ててマスクをつけた。気がつけば、熱がぶり返しているようだった。

「ちくしょう、ちくしょう………」

僕は呪詛の呟きを吐き出しながら、ギョツと目をつむる。このまま、俺なんて死んでしまえばいい。本気でそう思った。

しかし、そんな都合のいい死などは訪れず、僕は布団の上で少しづつまどろんで行った。

これが僕という、つまらない人間の人生。

そんなことを、眠りに落ちる間に、思ったか否かは、分からない。

ぼんやりとした意識の中で、やんわりとした冷たさを、何かの拍子で身体に感じた。底冷えというワードが、頭の片隅に浮かんだ。

僕が目を覚めたのは、僕に取っては意外すぎる時間だった。朝の四時半。部屋の中はいまだに暗い。普段なら仮に目を覚ましたとしても、トイレにすら行かないですぐに二度寝を始める時間帯だ。しかし、この日に限っては、この時点で意識が完全に覚醒をしていた。正確な理由は分からない。ふとした拍子に訳もなく石を蹴りた

くなる、くらいの何となくな感覚だった。

とにかく、何となく目が覚めた僕は、上半身だけ身体を起こし、電気をつけた。急速に広がった白い光に目が眩み、しばらくの間、堅く目をつむった。目が光に慣れる。僕は何をするでもなく、ボーっとあぐらを掻いて布団の上に座り続けた。物思いにふける、ということすらしなかった。何度か寒さによるくしゃみを出して、今の季節が冬であることを思い出した。

何もしないままで、時間ばかりが流れる。しつこいようだが、本当に、何もしなかったし、何も考えなかったのだ。耳鳴りのような音が、ひたすらに僕の中で響くだけだった。敢えて言うなら、ふとした拍子に、昨日の母との出来事を思い出したくらいだった。思い出しただけで、特に何とも思わなかった。

そんなこともあったなあ。母には酷いことを言ってしまったなあ。何でそんなこと言っちゃったんだろう。馬鹿だなあ、僕って。

そんなことを、何の感情も沸かないままで思った。

ふと時計を見ると、一時間ほどの時間が経過していた。曇りガラスから外を見てみると、夜はすでに明けかけているようだった。

外が、見たいなあ。

僕はスクリと立ち上がり、ベランダへと続く窓を開けた。

途端、多量の寒気を含んだ北風が、放たれた猛獣のような勢いをもって僕の身体に吹いてきた。僕は思わず身をすくめる。しかし、その実に分かりやすい冷たさは、返って僕の意識をクリアーなものにした。僕は両腕を僕の身体に巻きつけながらも、すくめていた体をしゃんとさせ、夜明けの太陽の光が射す方へと顔を向けた。光のまぶしさに、右手を目の上にかざす。かざしながら、僕の目の前に広がった光景に、僕はハッと息を飲んだ。

それは、深海のように色濃いコバルトブルーと、それを侵食する激しいオレンジとのせめぎ合いだった。

何処にでもあるような、中流家庭の民家群が広がる水平線の先で、夜と朝が勝負の決まりきっている、しかし、一日を始めるために必

要な闘争を行っている。

コバルトブルーとオレンジが、鮮やかな存在感を持って、僕の目の前に広がっている。さながら、希望に燃える少年の瞳を見るように、その光景は非常に純度が高かった。

僕は、そうすることがさも当然のことであるかのように、僕の口を覆っていたマスクを外した。興ざめな咳など、当然出るはずもない。僕は思いつき息を吸い、思いつき吐いた。自然などないに等しい住宅街の空気とは思えないほどに、それはとてもすがすがしい気分にさせてくれるものだった。

朝が 一日の始まりが、このようにして始まるのだということ、僕は初めて視認した。

そのことに、何か特別な意味がある訳ではない。それを知ったことによつて、僕の嫌なことが直つたりする訳でもなければ、それがもたらした様々な苦痛が消えてなくなる訳でもない。母と、あのような大喧嘩をしたという事実が、なかったことになる訳でもない。

世の中が、そんな単純に出来ていないことくらいは分かっている。そもそも、たかだかこの程度の光景を見たところで、全てが解決する筈がない。確かに美しくはあるが、こんなものは些細な、ほんの些細な、一日が終わるころには脳裏の片隅にも残らない程度の、ほんのちよつとした一光景。そんなものだ。そんなもので全てが消えてしまう程度の苦悩だったら、初めからないに等しいに違いないのだ。

ただ……そう。僕はただ、この光景を、美しいと思ったのだ。今までにあつた嫌なこと、そしてそこから連綿と続いている現在進行形の嫌なことは全て頭から抜け落ちて、目の前の光景をただ、純粹に美しいと思ったのだ。

それは とてもとても、清々しいものだった。そして、何だか不思議な高揚感をもたらした。

今の僕だったら、全ての嫌なことを乗り越えるための闘争が、出

来るような気がした。それが例えどんなに辛く、逃げたくなくなる死にたくなるようなことであつたとしても、僕は立ち向かえるような気がした。

僕はもはや、うずくまつて泣き騒ぐだけの駄々っ子じゃない。周囲に野次られながらも、何とか自分の足で歩いていける、きつと歩いていける、一人の人間だ。

冷たい風が、常時僕の体に吹き抜ける。僕の感覚をすり減らす、痛覚を連想させるような風。しかし、今の僕にはそれですら、非常に心地のよいものであつた。むしろ、この痛覚が僕にはいとおしかった。

僕は、ここにいる！　ここにいる！

僕はこんな恥ずかしいことをすら思つた。本当に、恥ずかしいしかし、当たり前のこと。けれども、僕はこんな当たり前のことをすら、長らく、下手をしたら生まれてこの方感じたことがなかったのだ。僕は　あまりにも僕という存在から、目を逸らし続けていたのだつた。

この日、僕は、僕が僕であることを、はつきりと自覚した。

ああもう、恥ずかしいなあ……。

僕は窓を閉め、寒さの残る体をそのまま布団の上に投げ出し、毛布を被つた。ぬくぬくとした暖かさが、僕の体を包んでいく。僕は、毛布の暖かさは好きだつた。包み込むような暖かさは、とても、それはとても、心地がよかつた。

僕は、枕をギュツと強く抱きしめる。少しでも、自分の心臓の鼓動を感じたかつた。うとうとした心地で、穏やかなまどろみの中に落ちていった。

七時ごろ、下から父親が「信吾、メシだぞ」と声をかけてきた。僕は布団のぬくさに後ろ髪を引かれながらも起き上がり、下に降りた。

リビングには、すでに朝食を食べ始めている父と母がいた。ふと、

母と目が合う。少し、力のない目。僕は小さい声で、「昨日は、ごめん」と謝った。母は、「いいよ、別に」とこちらも小さい声で答えた。それから僕は無言で母の隣に座り、朝食を食べ始めた。やはり僕は、自発的には言葉を発しなかった。たまに父がニュースのいうことに対して何か意見を出し、僕が母がそれに同意したり、ツツコミを入れたり、鼻で笑ったりした。

それから歯を磨き、それからトイレに入った。便意。僕が便座に腰を下ろしたとき、ノックの音が響いた。「入ってるよ」と僕がいうと、「分かってる」という声が返ってきた。父の声だった。

「昨日のこと、お母さんから聞いたぞ」

父が、怒っている訳でもなければ、茶化そうとしている訳でもないような声で言った。事実を事実として語る、といった表現が一番近いだろうか？ しかし、そこに無感情さが滞在している訳ではなかった。

僕はただ単純に、「うん」とだけ返した。

「……お前の話を聞いた訳じゃないし、今はあまり聞く時間がないから聞かない。けど、少なくともお母さんの話を聞く限りじゃ、喧嘩そのものも、お前がいけなかった」

「うん……」

「まあもつとも、それは別にどうでもいいんだ。次から気をつけなさい、とだけ言うておく。お前は結構、怒りっぽいところがあるからな……本当に、気をつけろ」

僕は少しうつむいて、三度「うん」と返した。

「でもな……」と、父が言葉を続ける。

「頼むから、お父さんやお母さんを、悲しませるようなことを、言ってくれるな」

それは、とても傲慢なセリフであつたに違いない。彼らは、彼らの罪をまるで意識していない。そう思わせるには、必要で十分なセリフだった。

でも　そういう父の声色が、あまりにも悲哀に満ちていて。こ

こで「ふざけるな」と言ってしまったえば、それこそ取り返しのつかないことになるような気がして。それはとても、残酷な行いのような気がした。

だから僕は、搾り出すような声で「ごめん」と謝った。くすぶる心に、傷口がうずく心に、ギュツとフタをして。

「……でも、俺はな……」と、父はさらに言葉を続けた。

「俺は、お前を産んだことを、後悔はしてない。お母さんだって、同じ気持ちだからな」

僕は、何も答えなかった。

それからしばらくして、パタパタとスリッパの足音が遠ざかる音が響いた。扉が開かれ、閉ざされる音が響くとともに、足音がパタリと止んだ。

僕はしばらくぼんやりと便座に腰掛けて、それから思った。

僕は、子どもを持たないだろうな。

この世界は、愛という無邪気な感情だけで子どもを産み落とすには、あまりにも怖い世界だった。

僕のような人間が、僕と同じようなことで悩み、苦しみ、死にたくなる。

それは、想像しただけで、非常に恐ろしいことであつた。

しかしそれは　恐らく、数年後には数十年後には、覆されることになるだろう。

僕はこれから、どんどんエゴイストな人間になる自分を想像できた。僕は、自分という存在のことを、手に取って確認してしまったから。生がただの呪いではなく　美しく光輝く呪いであることを、知ってしまったから。

果たして自分は、この思いをいつまで守っていられるのだろうか？　そしてその頃には、そうすることに罪をすら感じなくなってしまうのだろうか？

僕にはそれが、恐ろしかった。

どうか、この罪の意識を、忘れてしまわないでいてくれ。そ

うじやなきや、これから生まれてしまつかもしれない僕の子どもが、可哀想過ぎるから。

僕は、それを祈った。

生徒達の流れに乗って駅から出ると、僕は一旦立ち止まった。冷たい風が、スクールコートをすり抜けて僕の身体に吹き抜ける。咳は、もう出てこなかった。僕は一度大きく深呼吸をしてから、学校に向かって歩き始めた。まるで氷のような冷たさは、僕の肺に心地よかった。

コツコツと、生徒達の群れの中を歩く。周りでは、中の良い友人たちと話している生徒達の姿があった。僕はただ、一人で歩いている。

僕はこんな時、どうしようもない孤独感を感じる。まるで僕が、どうしようもないほどに一人ぼっちであるような気分になってくる。そしてそこから芋づる式に、どんどん悪い方向、悪い方向に思考が向かっていく。

今までにやられた手痛い仕打ち。暗く、暗く、暗いものだった僕の半生。僕が感じている、周りとの絶望的な浮き。僕自身が犯した、どうしようもなく馬鹿げた失敗。

ボクハ、シヨセンハ、ダメナニンゲンナンド。

今までの僕は、それを他人に見せ付けなくては気がすまない人間だった。今でも、何かの拍子に見せ付けたくてたまらなくなる衝動にかられる。

そうしなければ、怖かったから。僕の拙いまともな人間のフリが見破られて、僕がどうしようもない人間であることを見透かされて失望されるのが、どうしようもなく怖かったから。だから、僕は許しが欲しかったのだ。最初から僕がどうしようもない人間であることを知らせれば、変な期待などされなくて済むだろうと思っていたのだ。例えそれが 傍から見たら、ただの不幸自慢であったとしても。

僕は、今になっても、この孤独感を打ち切ることは出来ていない。そしてそれは、恐らく一生消えないものだろう。僕がどんなに幸福な待遇にあったとしても、その影では　僕がそうであったという過去が、「お前は、そんな人間じゃなかるう？」と、あざ笑って来るのだ。

僕は、怖かった。僕はまた、自分のこの孤独感を、人にぶつけてしまふんじゃないかって。少なくとも僕は、他人に自分の傷をちらつかせて自己満足して、他人に不快感を与えているような、人間だったのだ（あるいは『なのだ』）。

そんなことを考えているうちに、僕は学校についた。二年生用の玄関から上がり、僕の教室に向かう。教室に入り、カバンを置いてしばらくぼうつとしてしていると、廊下で幸田と高崎が談笑している姿を見かけた。

僕は彼らの元に向かい、後ろから「おっす！」と声をかけた。

そこで高崎が、

「わあ！　ゲイが来たー！」

と、大げさに、驚いて見せた。

一瞬、僕の脳裏に『権力者』という言葉がよぎる。弱者をあざ笑い、屈辱を与えることで、自信の満足を得る、『権力者』。

しかし僕は　その言葉を、すぐに打ち消した。

「うふふふん。高崎ちゃん、会いたかったよおん。今日もイイ男だねえ」

そうカマっぱい声を出しながら、僕は両手を広げながら高崎に近づいた。それを受けて高崎が、これまた大げさにびっくりしたように、

「ギャーよせー！　イイ男だったら、幸田がいるじゃないかー！」

「ちょ、ちよつと、何で僕なのー！」

そう狼狽する幸田。僕は、お腹から笑い声を上げていた。腹の底から湧き上がる笑いは、苦しいながらも心地よくって。そうすることとは、とても幸福なことだった。

その時、僕の影が、僕の頭の中でささやいた。

ほら、お前はそうやって利用されている。屈辱的な言葉で、おまえ自身が嘲弄されている。お前はただの、代用可能なピエロなんだよ。お前でなくなつて、笑いさえ起これば、別にお前でなくなつて構わないんだ、と。

そうかも知れない、と僕は思う。

ピエロを演じる者は、何も僕じゃなくなつて構わないんだと。僕より面白いピエロが現われた時、僕見たいなつまらない人間は、即座にお払い箱になるだろうって。

でもね、僕の影さんさ。と僕はやはり思う。

それだって、別に構わないじゃないかって、僕は思ふんだ。僕と彼らは、こうして幸福な笑いを共有しあっている。それは、とても良いことじゃないかって。それは、とても楽しいことじゃないかって。ピエロは代用可能な生き物だ。でも　今は僕だ。僕がピエロなんだ。僕が、笑いを起こしているんだ。だから、僕が卑下たる思いを抱くことはない。僕がいなければ彼らだって　ピエロが起こしうる笑いを、作り上げることは出来ないんだから。

後悔するぞ、と影はささやく。

そうやってお前は、自分を偽って、自分の最低をごまかして、周りが求めるピエロとしての自分に逃げ込んだ。お前のその選択は、自分の意思によるものじゃない　自身の弱さが生んだ、ただの思考停止だ。

そうかも知れない、と僕は思う。

確かに僕は、このことをきつと後悔するだろうって思う。というか、僕は時々、このことで死にたくもなるだろうって、そう思うんだ。でもね、僕は　そうすることが、僕に取っても幸福であるんだとも思ふんだ。保健の先生がいうように、『真つ暗なところで一人、黙々と考え込み続けて』いるよりは、周りの求めるピエロでいる方がよっぽど楽で、楽しいことなんだって思ふんだ。僕が真つ暗なところで考え込むのは、結局は、今までに積み重ねられてきた復

讐心から来るものなんだ。そして僕が、その復讐を成し遂げられるだけの役者ではないことを、もはや経験則によって悟っている。そしてそうあることは、ただむやみに僕の弱さを思い知らされ、その弱さに縛り付けられるだけなんだって。

お前が、僕を最低な人間だと思うなら勝手にすれば良い。僕だってそう思うし、恐らく僕という人間の本性を知れば、誰だってそう思うのだろう。

でも　一つ覚えておいて欲しいのはね、僕はそれでも生きていくんだってことだよ。最低は最低なりに、みつともなく地べたを這いずり回りながら生きてるんだ。それを否定することは、例えお前だろうと許さないよ。

今までの僕は、そんな自分が嫌だった。そんなみつともない自分が大嫌いで、周りと自分を比べて失望ばかりしていて、死んでしまいたいくらいだった。でもね、僕はどれだけ二ヒリストを気取っても、死んでしまうことは出来なかったんだよ。何故なら、死ぬのが怖いから。とても、とても、怖いから。

死にたくても、死ねない。

生きたくなくても、生きるしかない。

こういうのを現実って言っただろうねって、今となっては思うよ。結局僕はね、生きなくちゃいけないんだよ。この、惨めな自分を引きずって、最期の時までみつともなく生きなくっちゃいけないんだよ。うんざりなことに、どうやらそれは『一生懸命』じゃなくっちゃいけないらしいんだ。そうしなきゃ、特に僕みたいなぶきつちよな人間は本当に生きていけないみたいだから。

それが、現実みたいだから。だから僕は生命を『呪い』と呼ぶことにするよ。

でもね、少なくとも今は、そのことをあまり悲観していないんだ。だって、呪いは必ずしも、僕にとって有害なものではないって気がついたんだから。

そう、僕は確かに弱い人間だし、駄目な人間だ。僕は弱い弱いピ

エロであるが故に、きつと孤独の中に沈んでいくんだろうなっと思う。でも、そうあること自体は、決して悪いことじゃない。それが悪として認識されるのは、その弱さを言い訳にしてその場でうずくまっている時だ。そしてそうあることは、そうある人間にとっても、とても、とても、つまらないことなんだよ。

だから僕は、歩こうと思う、話そうと思う、笑おうと思う、おどけようと思う　すなわち、ピエロになろうと思う。弱い人間にだって、幸福を得ることは出来る。僕は、幸福でありたいんだ。それこそが、そうあるうと死に物狂いになることこそが、生命という呪いが課した宿命であることに、僕はやっと気がついたんだから。そしてそうすることで、呪いは珠のように光り輝くんだって気がついたんだから。

僕は、二度と死にたいとは呟かない。死にたいって思う心を、そう思わせる環境を、思いつきりぶん殴ってでも訂正させてやるうって決めたんだ。そうあるうとする姿勢こそが、呪いを珠に変えるための最も有意義な方法なんだって分かったんだから。

だから　今は消える僕の影！　お前の鬱々とした愚痴は、僕が独りぼっちになった時に、いくらでも聞いてやる！　僕は、幸福になるために今を生きる。ピエロにだって、なってやる。僕はそう、決めたんだ！

お前のそのクソツタレな根性で、今の僕を押しつぶすんじゃない！
影はふつと歪み、僕の前から姿を消した。

僕たちはしばらく、話を続けた。ささいな日常会話から、教師のこと、部活のこと、そして僕に対するイジリまで、僕たちは話を続けた。

僕は笑ったり、笑わなかったりした。そうしている時間は　とても楽しいものであった。

朝のホームルーム五分前のチャイムがなった。誰かが、「やっべ。

そろそろ戻らないと」と呟いた。僕と幸田と高崎は、それぞれの教室に戻っていった。僕は去り際に、「じゃあ、今日も一日頑張つてね」と二人に言った。

席についた僕。独り、席に着いた僕。僕……自分。クスクスクスつ、と笑いかけてくる僕の影。僕を、惨めな人間だと認識させようとする、僕の影、

影は、死んだ訳ではない。

と、僕は思った。影はまだ、僕の中で生きている、と。

僕はこれから、この影と戦うことになるだろう。今まで僕が、見てみぬ振りを決め込んでいた、僕を惨めな人間に仕立て上げた影と。そして僕はたまに、その影に取り込まれそうになるだろうって。

負けたくない。

もう、惨めな自分には、戻りたくない。あるいは、もう惨めな自分ではいたくない。ひたすらに、それを思った。

朝のホームルームの始まりを告げるチャイムとともに、担任が教室に入ってきた。

起立、気をつけ、礼　おはようございます。着席。

どうか今日という日を、幸福なものに出来ますように。

ポケットの中に、何となく入れておいたマスクを握りつぶしながら、そんなことを思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0767f/>

マスク

2010年10月8日15時37分発行